dislocation

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｉｓｌｏｃａｔｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ９８０４Ｔ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
めちゃくちゃ楽しいと思います。

あやふやな

光が入ってきた。眼を開けたのだから当然か。

全ての物が同じ位置にあるように思えるけど架空から浮き上がっているだけにも見える。真実の光景がようやく解るようになったのかもしれない。そう考えるとこの部屋には実は何一つ存在していないんだなと繋がる。矛盾しているけどね、様々が。

鼻にふと。火で熱して物質を分解させたような、理科の授業で実験の時にかいだ、焦げたような、懐かしい臭いがしがみ付いてる。くんくん、くんくんと臭いの強くなっていく方へと近づいていくと分厚い辞書のようなアルバムが一つ、フローリングの床に転がってる。拾ってから鼻を近づけてみると、理科の臭いの根源はそれではないと気が付かされる。これは本のカビたような、故に不愉快な香りだ。いや、不愉快だった、だ。そういえば懐かしさという感情だってもう無いのだった。崩壊したのだものね。そういうことは。

漬物石のように重いアルバムをそっと床に置く。何の柄も模様も無いシンプルなカーテンを左右に開いて、東より昇りはじめた円の形である陽を眺めていると、なぜだか涙が溢れそうになった。涙腺がやられそうになって、鼻をずずっと啜っていた。あれ、おかしいな、と思いながらカーテンを閉める。光が差し込まれなくなり暗くなった屋内で、カーテンの裾を握ったまま、しばらくぼーっと突っ立っていた。その時、セットしていたらしい目覚まし時計がジリリリとやかましい高音を鳴らして、ハッ、と意識を取り戻す。金色に輝いている装飾の、安物目覚まし時計。ベルを止めると同時に声が階下より響いてくる。

――朝ご飯が、来たよ。

そっか朝ご飯は来るものに変わったのだった。すると焦げていて懐かしい臭いとは朝食が発する臭いであったか。階下に行かなければ確認は出来ないので、個室ドアを開けてフローリングの床を滑る

ようにして歩き、階段をタタンタンとリズミカルに下る。これら五感で感じる全てが存在していないものでしかないが、そのことを空しいとは思わない。真実の姿こそがこれなり。

窓がある居間。そこにも光が入ってきていて、影と交錯している。外から差し込まれてくる光線によって輪郭を得ている人影二つが、椅子に腰掛けて、両の掌を合わせて拝んでいる。何に対して拝んでいるのかは明白。祈り。生きていることに対する祈りを欠かさない。

テーブルの中央にいつも置かれている一輪の花が、オレンジ色の花に変わっている。昨日までは青紫の花だったが。そのことを尋ねる前に母の影が言った。

「これはね、アキノワスレグサっていう素敵な名前の花よ。咲いていたから摘んできたの。根茎は食欲不振と不眠症に良いらしいから、調子が悪い時には食べちゃえばいいんじゃないかな、根茎を」

「食べて効くわけじゃないでしょう」

朝から良く口が回るものだ、と思いながら椅子に座りそのアキノワスレグサとやらを数秒見やる。朝のせいか胃がぎちぎちしているけど、そういう状態をスッキリさせてくれるなら花瓶から引っ張り出して根やら茎やらを食いちぎってみてもいいかもしれない。不味そうだけど、花のオレンジはたしかに綺麗なのだろう。うん、そういう花だ。

そんなことを思いながら。私の両親であるはずの二人に目をやれば、真っ黒い影のままの二人の胸の、心臓だけが赤くて眩い。血管さえも見えない二人なのに心臓だけが赤く映えているのに理由はあるのだろう。心臓が膨張したり収縮したりを繰り返しているのが多少、朝の胃にはグロテスクである。しかし実際には気にならない。全ては架空で崩壊しているから。

今は朝食を食べよう。四角いキューブの形をしている固形物がいつも通りの朝食。どこの家庭でも今頃これを食べているだろう。やけに大きくて白い皿の上にチョコンと一つ不釣合いに、灰色で小さなそれが乗っかっている。ぱくり、と細かくちぎって欠片を飲み込

んでみれば、苦味が舌内を駆けずり回る。多分ゴーヤより十倍は苦い。
「相変わらずの味だよね。考えられないような苦味って奴」
そんなことを呟きながら、母と父の影も苦味を口に放り込んでいるのを眺める。黒い輪郭がぶるると震え上がるような仕草から、真っ黒な二人だけど苦味に身体が反応したのがわかる。味覚を携えている人なら誰もが鳥肌立たせてしまうくらいに苦い灰色固形。
でも朝食はこれで十分。この固形一つだけで昼まで持つ。我慢すれば夜まで持つ。小さな固形に高エネルギーが凝縮されているという凄さ。味は悪いが、味の悪いモノを拒否する人間なんていないのだから問題は無い。クレームも出ない。苦味を感知はすれど、それだけだ。感知するだけで拒否を発露させたりはしない。
ふと、灰色固形を全部飲み込んだ時に、自室で嗅いだあの焦げたような臭いのことをすっかり忘れていたことに気が付く。あの臭いは何だったのか。どこが発生元だったのか。今までこの家であんな臭いが溢れたことは魚が全て駄目になってしまった時くらいだ。……今日はいつもと変わらない日常のはずなのに。何かが起きる……いや、思い込み過ぎ……もっと単純なことかしら。
「この花綺麗だと思わない？」
「そんな花、見たことも無い。なんでそんな花を摘んできたのだ？」
「花は愛でるものでしょ？」
「もっと良い花があるよ。そんなのより……」
「良い発色をしてるじゃないこれだって……」
「そうは思わないなぁ」
「まぁ……！」
「ふん…」
二つの影はいつも通りの朝と同じく仲むつまじい。あ、もしかするとこのオレンジの花びら、アキノワスレグサって奴が焦げた臭いを発する植物なのかもしれない。そう想像できなくもない。そういうわけで私は花瓶に鼻を近づけることで花の香りを嗅ぐことを試み

る。くんくん、と。黒い影二人が会話を止めて訝しげに私を見ている雰囲気が周囲にあったが、気にせずにチェックすれば結果はＮＯ。この花が焦げた臭いを発しているわけではない。そもそも、居間にて焦げた香りはしていないのだから花が元凶の訳が無いのだ。原因は家の中にあるのではなく、外部にあるのかもしれない。

「落ち葉を燃やしてるのかな。誰かが」

「急にどうしたの？　落ち葉？」

「いや、焦げた臭いがさっき、上で、ね」

「突拍子なことを言う。まあ秋なんだから焚き火をする奴くらいいるんじゃないか」

「朝に？」

「朝だろうがするさ。昼よりはするだろう。する必要がある人は」

「火事ってこともあるかもね！」

「縁起でもないことを言うもんじゃない。言霊という奴を知らんか。……ん、俺には、音が聞こえるぞ」

「臭いじゃなくて？」

「やかましいこの音は上から響いてきているようだが。聞き覚えがあるな。毎日聞かされる音だ」

「……あれ……本当だ……聞こえる」

耳を澄ませば聞こえる。ジリリリリ。天井の向こうで金色の装飾、目覚まし時計がベルをかき鳴らしている気配が確かにある。会話を途切れさせて静かにすれば、鳴っているのは明らかだとわかる。おかしいな。

「止めたはずなんだけどね？」

「寝ぼけていたのかもね」

「でも押した感触が残っているような気も……」

「現に鳴っているんだ。夢の中で押したのを現実で押したものと勘違いしてるんだよ。お前の脳味噌がね」

黒い影は、トントンと人差し指で自分の側頭部を叩いてみせる。しっかりしろと言いたいのだろう。

記憶では確かに止めたはずなのにジリリリは確かに聞こえる。彼の言うとおり、現実と夢をごちゃごちゃにしてしまっているのだろうか……私の脳味噌が……。

「止めてくる」

学校へ行く為の支度が間に合わなくなるんだから急ぎなさい。そういう母の言葉を背にしながら居間から抜けてフローリングを今度はひそひそと歩いてみる。何だか不気味というか、おかしい、だからリズミカルにタンタタンと階段を登っていくわけにもいかないと思える。でもあえて陽気に振舞ってみせるというのも一つ手段かもしれない。……ん、私は何かの気配を感じているのだろうか。まるで人と会う前にどう振舞うか考えている時のような思考をしているけど……。そうか、私は目覚まし時計を確かに止めたとわかっているから、再びそれが鳴っていることに人為を感じているんだ。それが私の部屋に蔓延していると疑っている。人為。或いは、人ならざるものということもあり得るか。言葉にしづらいもの。例えば、幽霊。

部屋の前に立つ。ドアは無意識でしっかりと閉めていたらしいから、開かなくちゃ中に入れない。ジリリリは喧しく大きな音として鼓膜を振動させてくる。止めたはずの音。ドアノブを捻り部屋に入り、停止させなければいけない。私以外にやってくれる人もいないだろうし。あれ、なんか皮肉気じゃないか？気のせいか。ああ思考が乱雑気味。怯えている？　崩壊したんじゃなかったっけ？だったら怯える心を持ち合わせているはずもない。

「失礼、しちゃいますよー」

って、こんな言葉遣いの時点で気が引けているではないか。不気味な空気から発生させられる威圧に押されているのではないか？ていうか自室なんだから無言で入ったっていいわけだし。ジリリリリ。うるさいのでさっさと止めたい。息を止めてから、一気にドアノブを捻り自室に入り、駆け込む。目覚まし時計が置いてある場所は、当然、把握しているのだから一直線にそこへと。喧しい音を鳴

らしているその根源へと。ジリリリリ……すごくうるさい……はい、止めたー。

途端、静寂が耳に痛い。スズメとか鳩の鳴き声が外から聞こえて来る。焦げた臭いはしない。

「やりとげた感があるね」

感慨深くも無いのにそんなことを呟いてみる。ジリリが止まるとさっきまであった怯えというか幽霊がいそうな不気味感というのが消失して、普段の晴れやかな朝という感じになったね。さあこんな所にいても暇なだけ。学校に行くための用意をしなければならない。時間的に。朝というのは忙しいものだ。

タンタタンリズムを容赦無くぶちかましながら階段を下り、フローリングも滑って歩いて居間へとあっという間。おそらく父と母も朝食を終えて支度を急いでいるのだろう。黒い影が右に左に慌しく行き交っている気配がある。私も右往左往しなければ遅刻してしまう。教室に遅れて入るのは恥ずかしいのだから遅刻はゴメンだよ。

そんなことを思いながら扉を開けた私の鼻腔に入り込んできたのが、焦げた臭いだった。

元凶がこの部屋に現れたのだ、と思い焦燥が芽生える。焦げ焦げ焦げ焦げ。鼻をひくつかせて根源を探していく。支度を急がなければならないが先決なのはこちらだ。何故？　それはわからないが、くんくんと行為を止めずに歩んでみれば鼻が突き当たったのは花。あれ？

「アキノワスレグサが、枯れてる……」

上階に行く前まではあんなにも美しいオレンジの花を咲かしていたというのに茶色くなってパリパリ。触れれば砕けてしまいそう。惨めな様。そこが焦げの発生元になっていたのだ。華やかなオレンジ色の時は良い香りを放っていたというのに……。空しいね。盛者必衰だね。

つまり枯れた＝焦げた臭いということだ。原因は枯れ。では私の部屋では何が枯れていたというのだろう。何かが枯れていたから焦

げた臭いを発生させていたということでしょう？
　確認したい。だけど朝だから時間は無い。学校に行くことを優先しなければならない。ジレンマが発生している中、何時の間にか誰かが点けて点けっぱなしのテレビの画面を見てみる。それによって時刻を確認してみれば、そろそろ家を出なくちゃやばい頃。うわぁ、ってもう開き直って遅刻しようと決意して、ぼんやりとした足取りで洗面台に向う。洗顔やらいろいろ。それで時間を食い潰してから制服に着替えてもう一時限目が始まっている時刻。やばいかなぁと微妙に胃が重たくなりつつ椅子に座ってテレビを見てる。ニュースを見てる。父母はもう出掛けたはずだ。右往左往の気配が無くなって居間は静寂。テレビの音声だけが響く部屋で一人、何だかやる気の無くなってしまった神経と共に生きてる。やる気は無いんだ？そういうのは崩壊したのじゃなかったっけ。生きてる？生きてるな。今日は何かが違う気がする。そして、テレビから焦げた臭いがしているような気がする。
　椅子から立ち上がって、花の焦げを勘違いしているだけかもしれないけど、テレビが枯れているような予感が当たる気分。そうだおそらくテレビは枯れている。何故だろう？理由は今日が何の記念日でもない普通の一日だからということでいいだろう。世界は居間から枯れていく。テレビの前に立って鼻を近づけてみると、確かに枯れた臭いがそこからしている。機械の内部が燃えているだろうか。枯れているのだね。私はすっかり馬鹿で間抜け。こんな一大事が巻き起こることを今になって理解した。崩壊の崩壊。その後に続くのは何？
「意味わかんない？」
「こっちを向けばわかるかもね」
　出掛けたはずの黒い影二人。それの声だとわかって心臓がドクンと鳴る。目覚まし時計といいこの黒い影の二人といい焦げた臭いといい、こっちに認識を上手にさせてくれない。出掛けたと思ったのに背後にいたり、咲いていたのに枯れていたり、止めたのに鳴って

いたり。馬鹿げている。ぼやけている。振り向いた私には、黒い影二人が互いの、唯一赤い色の心臓、それを握りしめ合っている景色が映り込む。互いが互いの心臓を握り合い、ふとした弾みで潰してしまいそうな危うさの心臓二つ。崩壊の間際にはこういう景色が発生するというのか。普通、臓器に触れることはできない。自分も他人も。腹を捌かない限り。でも他者同士で血液ポンプのそれを握り合っている互いが、私の目の前に確かにいるように見える。勿論これも実は浮き上がっている架空に過ぎず、私の脳味噌が幻想を誤認知しているということなのかもしれぬが。ああ意味がわかんない！クッキーが食べたい！糖分を摂取して元気を取り戻したりせねば！ああ、灰色固形なんて朝食にして食べてる毎日なんて狂ってたよね。それもようやく崩壊するのか。崩壊した居間が再び崩壊をしていくのは先は見えないけど狂ってた今までよりはマシだ。灰色固形なんてもう食べたい。これからはクッキーを食べよう。朝食に。クッキー。

「だから二人も心臓の鷲掴みなんて止めて、クッキーでも作っていればいいよ。勝手にね」

そんなことを言ってみたけど影二人は鷲掴みを止めない。母の影が、テレビに人差し指を出してからこう言った。

「あら。娘。あなた、テレビに出るようなことをやったのね。過去に」

「えっ？」

「映ってるわよ。ちょうどナイフであれを刺したその瞬間が画面にね」

いや何言ってんの、と思いながら振り向いて画面のニュースに眼と耳を傾ければ真実がそこに。いや真実なのか虚偽なのかもう理解不可能の崩壊した過去。崩壊する以前の私達がテレビに確かに映り込んでいる。灰色固形なんて食べたら悪態を付き、誰かに嫌われたと思ったら苛立ち、誰かを馬鹿にすることに喜び、喜怒哀楽でゆらゆらしていた、崩壊する以前の私達が生きていた頃の映像が、今の

テレビニュースで何ゆえに流れるのだろうか。居間で。しかも私がぬいぐるみを刺したその瞬間が映っているなんて全国の晒し者。今になって何故。居間で。
「お気に入りのぬいぐるみだった。それを刺さなくちゃいけなかったんだよねぇ」
「お気に入りなのに刺すだなんて」
「病んでるって思った？」
「そりゃ誰でも思うだろうね。ぬいぐるみとナイフがそれを連想させるよ」
「でもそんな過去も崩壊したじゃない。病んでたその光景も、被害を受けたぬいぐるみも。全てが過去の世界の遺物でしかないでしょう。今やもう私達はこの世界で漂っているだけの幽霊」
「幽霊だって喜怒哀楽を持ち合わせるさ。だから崩壊させなくちゃいけないんだよ」
「再び？」
「そう。この世界の物語を崩壊によって再び発現させる。良いことさ」
「なら何ゆえにこういう今の世界が生まれたと思うんですか？　これが良いと思ったからみんなここで灰色固形を貪る日々を送っていたのではありませんか」
「飽きたのじゃないか」
「そんな簡単な理由で……」
「そうだ。さあ崩壊を開始するぞ！　ちょっと怖い雰囲気のこの物語がどう崩壊していくのか楽しみじゃないか。そのきっかけを、心臓二つがちぎれる音ということにする」
「犠牲に？」
「違うよ。そんな安っぽい理由は餓鬼がやればいい。ここは大人の世界だから故に、餓鬼のお前はひどい光景を見せられたことで哀れに浸ればいいじゃないか。じゃあな」
「待ってよ！」

「「待たない」」
父母の黒い影が私にそう告げるのと同時に、鷲掴みの心臓からぶちぶちぶちと血管のちぎれる音が発された。鷲掴みの手と手が互いの心臓を黒い肉体よりちぎりとって、トロフィーを掲げるかのように宙に持ち上げた。その姿勢のまま、二人は真っ黒い影のままフローリングに、どたん、と大きな音をたてて倒れた。
私はしばし呆然としていたが、焦げた臭いのことを思い出すことで意識を覚醒させた。
そしてクッキーを食べたいという希求によって気持ちをはぐらかしながら、テレビにもう一度視線をやると、過去の私達をジッと見つめてみる。私はとても気持ち良さそうな、恐ろしい顔をしている。ナイフをぬいぐるみに突き出して何がそんなに楽しかったというのだろうか。わからないが、校庭には血のたまりが出来ているではないか。ぬいぐるみは哀れだ。
私は学校へ行かなくちゃいけない、とようやく時間のことを思い出した。

校舎にて　タロット占い師の愚痴を聞かされる

人間をボールにして金属の棒で打って遠くまで飛ばすという遊びが流行っている。一時限目の授業をさぼって、畑の邪魔にならないように注意しながら、その冒涜的なお遊びを学校の門から眺めていたが、あまり見ていると私がボールにされてしまいそうなので、畑のおばちゃんに「ひどいもんですよねぇ、あれ」と告げてから校庭を歩いていく。その私の制服姿の後姿におばあちゃんの声が飛んでくる。気だるそうだったが言葉数は多かった。

「あんな人間ボールがこっちに飛んできたら野菜が駄目になっちゃうよ。無農薬でキャベツを育ててるから虫食いをなんとかしなくちゃいけなくて忙しいってのに、土台が良くなくちゃみんな駄目になっちまう。どうにしろ怖いわよ私は。それとも、こんな所に畑を作ったのが悪かったのかしら」

私は振り向くこともせず、後ろ向きのままおばあちゃんに手を振って別れを告げる。ガガキーン。ボールが金属の棒で打たれた音が校庭中に響き渡る。むごい音だ。

それを背にしながら、私は校舎へと踏み入ろうとする。昇降口の前に立ち、ふと見上げれば、茶色の校舎と大きめの時計。茶色って不潔。なんでこんなカラーリングにしたのだろう、誰も望まないだろうに、と今さらなことが過ぎるのは崩壊のせいだろうか。普段は気にもかけないのに。

入り込んだ鉄筋の校舎内部は、昇降口からすぐの広くなっている場所がとても閑散としていて不気味なくらいだ。暗くはないのだが。吹き抜けになっているから天井が高くて、窓も大きいのが何枚かあるから日当たりが良い。夏は日差しが暑かったけど。

たまにやってくる占い師のおっちゃん。見るからに頼りなくて髭を生やし放題、に加えて全体的に不潔でしかも偉そうにふんぞり返ってる時もある。やけに恐縮してる時もあるのだが。そういうおっ

ちゃんである占い師は、しかし風貌の怪しさの割には結構人気があって、何故かと言うとおっちゃんの得意とするタロット占いが実に良くて、結構当たったりする（前、私が進路相談に占いをふざけた気持ちでやってもらったところ、月の正位置だと言われた。私はごちゃごちゃで何もわかっていないから、わかるように努力しなくちゃいけないよと上から目線で諭された）。また、彼は不潔な風貌をしてはいるのだが雰囲気が全く無いというわけではなくて、つまり彼は占い師っぽいのだ。特に占い師を連想させるような服装をしているという事でもないのだけど、言葉では表現し辛いフィーリングでしか感じることの出来ない魅力を持っているような気がする。フィーリング。そうだ。私達はそれで彼をわかっていたのだ。そういうことを感知できる人間としての機能は何時の間にか、復活させていたのだ。何時からだろう。崩壊が崩壊する予兆はとっくの以前に始まっていたということじゃないか。やはり、おかしい。崩壊は既に段階を進めている。

となると、今見えている景色は現実だろうか。それとも幻！

悩みそうになる私に、占い師が波を描くような緩やかさで手招きをしてくる。こっちにおいで。

お花畑にでも誘うかのような軽やかおっちゃん。二時限目に突入している時刻の今、暇でもあるのは確かだ。招かれてみようではないか。

「おはようございます。どんな具合ですか」

軽やかな招きに応えたのだから軽やかぶった挨拶。陽気にね。

「もうこんにちわの時間だよそろそろ。おはようとは言い難いんじゃないかな」

「たしかにそうかもしれません。……今日はもう、誰かのことは占ったんですか？」

「いや、まだ。人が増えるのは、お昼過ぎてからだね。その時間帯というものは中空の陽に照らされる心がはしゃいで、僕のような人間にも人々が近寄ってくるのさ。太陽の力も借りて、僕に立ち向か

うことなんて容易になりえてくれる。それがお昼過ぎの活気じゃないかな」
「ははっ。なるほどっ」
正直、何言ってるかわからないけどそこは世辞だ。おっちゃん良く喋るな。
暇潰しにはなるかもしれない。しかしこれは、苦痛かもしれない。
理由を付けて立ち去ろうかと思ったが、タイミングを掴めない。
「この間僕を見て逃げ出した女の子がいたよ。それはこの学校の生徒なんだから、僕がカウンセリングや進路相談はては恋愛相談まで引き受ける占い師だと、集会で教えられたのだから逃げる必要は無いわけじゃない。なのに彼女は僕に近づこうとしない。一切ね。謎だった」
「はぁ、なるほど」
「考えたよねやっぱり。理由というのを解明しないと不気味な感じというわけだから。僕は三日三晩寝ないで、自分を占うことをしてみたり、自己分析してみたり、その逃げた女の子がどういう人物なのか想像してみたりした」
「そうなんですか…」
「結論は出たんだよ意外にも。こういう理解できない事態は与えられている情報が足りないと解析ができないことばかりだけど、僕は自分の過去に行き着くことで納得できたんだ。そうか、結局僕は何一つ変わらない、昔のままなんじゃないかってね」
「何か、あったんですか？」
「昔ね、自分の性格を他者に嘲笑われていたことを陰口伝いで知ったことがあったんだ。ひどいよね。僕は嘆いてしまったよね奥底から。涙がちょちょぎれるなんて表現をしたくなる絶望に浸りたくなっても文句は無いよね。ぶちぎれて殴りかかっちゃって。それで結果、少年院だもんね。送られたもんね。笑えたよ心から。心底から。陰謀を感じたよねどこかに。で、僕はそれから日々を送る内に、何処かのタイミングで更生できたのは、何か全てがどうでも良くなっ

てしまった時があって、それのおかげで更生できたのだね。突然だった。前後なんて無かった。いきなり僕は更生されたよ。理由のわからない何かによって、細かな憤り全てが安らぎへと姿を変貌したのさ。で、ね、話が少し脱線したから元に戻すけど、つまり僕に怯えたあの女の子は、更生する以前の僕を見出したんだよ初見でね。きっと彼女は動物的な勘を持ち合わせている純粋な心の持ち主だから、邪悪な僕の心、戦車の逆位置であり愚者の逆位置でもある僕の心を見透かしたんだ」

「そういうものですか」

「そうだよ。最近僕は、それをきっかけにして過去に思いを馳せている。いや馳せさせられているというのが正しいのかな？　悪い兆候だよ。健康な状態から遠ざかっているのかもしれない。でも責任は僕自身にあるんだ。……人生とはそういうものだよ。結局、ね」

「すごいですね。悟ってるみたいで」

「はは。少しイラッとしてる？　それともただの相づち？　僕は占い師という肩書きの下にカウンセリングや進路相談はては恋愛相談までしているけど、不勉強のせいか才能が無いせいか世界が悪いせいなのかわからないが、宇宙を感じるまでの理解を得られたことは、今まで一度だって無い。知り合いの占い師とかには、結構いるのに」

「そういうのに、なるつもりなんですか？」

「なる、っていうか、体験してみたいんだよ、それを。興味心っていうのかな……ほら、僕、戦車で愚者の心だから。……いや、まいったよ。人生ってもっと上手く行かないものかね？　前世の行いが悪かったのかな……皮肉なだけの人間だったのかな……つまらない奴だったのだろうか……」

「私はおっちゃんは楽しい人だと思いますよ。おっちゃんの前世がどうだったかは、知りませんけど」

少し格好つけたようなことを言ってしまった。

何だか勢いで。

するとおっちゃんにその言葉が予想以上に響いたらしく、真ん丸

の瞳がうるうるっと潤んだのがハッキリとわかる。
おっちゃんは懐からハンカチを取り出して、自分の涙を拭き取ってから言った。
「あなたに、幸あれ」

不幸人間と優しい香と尾狼業太郎とガラスの破片がある。

南極大陸に重武装をして百人くらいで乗り込んだのだけれど、吹雪に襲われてみるみる視界が奪われてみんなの姿が見えなくなった。それで焦っている内に時間が過ぎて行き、気が付けば気が付けば気が付けば九十九人が私の百八十度から行方不明だ。三百六十度で頑張ってみても行方不明だ。何処を見ても大自然の猛威。吹雪の中で私は小さな個人。大企業の中で孤立してしまったけど辞めるわけにもいかない社会人のよう。大きな枠の中で他者からはぐれ落ちて鋼鉄の精神になってはぐれメタル。経験値をたんまりあなたにあげる。

そんな独白を心の中でしてしまった理由は、崩壊と、そして私自身が遅刻をしている今の状況が原因であろう。既に三時限目が始まっているのだろう。時の進み方は曖昧だ。私が扉を開ける頃にはきっと四時限目が始まっているに違いない。そして皆が私を指差してこう言うかもしれない。

「はぐれて残念だね。でも誰も、同情するだけで手を差し伸ばしたりはしないよ。君からはじいてしまうんだからね。おはじきかっつぅの」

よくわかっている同級生たちじゃないか。

崩壊してからこっち、そういう癖が出来てしまった気がする。

だから孤立しているかもしれないと危ぶむ。大勢に取り囲まれているような焦燥に塗れて、ヘドロで身を覆い隠したいと願う。あの占い師のおっちゃんはそういうことを思うだろうか。宇宙を理解するというのは、そういうことも超越しているから気楽な心持ちだろうか。悟り。ああ、だとしたら悟りたいものだ。しかし修行を詰めるような真剣さを私は持っているだろうか。ふざけた心持ちで占いを受けるような女なのだから、きっと駄目なのだろう。私はおとなしく取り囲まれてあの占い師のおっちゃんと同じ様に宇宙を理解することは出来ない。

校内名物でもある螺旋階段を登りながらそんなことを想像している内に、私が入るべき教室のある階に辿り着いた。十三段目の階段。普段はない、一つ多い階段。これも現実かな。

（すっかり病んでいるじゃないか！　おっちゃんに相談でもすれば良かったかな。波乱万丈な人生を送っていそうな人だし……。でも私は別に波乱万丈な出来事を体験してきた人間というわけでもないから、おっちゃんに相談すると波乱万丈さに圧倒されてしまうかもしれない。……じゃあどうすればいいのだろう？）

自問しても一人なのだから誰も応えちゃくれない。ならば廊下を歩いていくまでだ。

普通の廊下。外観は茶色で目立つ学校なのに、内部は至って普通に造られたらしい。ただ、奇妙な飾りがたくさん置かれているから、何か魔術的な妖しさに溢れている。誰がこんな内装に改造してしまったのかは、世間に疎い私でも知っている。親がＰＴＡの会長だからと言って調子に乗っている奴がこういうことをやってみせているのだ。そりゃそいつにも理由があるから、こういう突飛で奇抜で偏っていて近寄りがたくなるような行為を、こんな学校という公共の場でやっているのだろうが……。しかし案外ＰＴＡの力とは凄まじいものだ、こんな無茶苦茶なことをしてもそいつは学校で実権を握り締めている。まったく、末恐ろしい話だ。下僕を作るのが好きそうな性格をしているのが、こんな所にも表われているのだ。勘弁して欲しいが、この学校はあいつの思いのままなのだろう。才気に溢れていて、外見が他者に妙な威圧を与えるあいつのオーラは、人を引き付けたり遠ざけたりする。つまり他者から好かれたり嫌われたりが激しくて、注目を集める。そして嫌っている連中はあいつにＰＴＡという後ろ盾のせいで下手に手出しが出来ないから、あいつを好んでいる連中が目立つ。あいつはそれによって学校にて、覇者だ。学校にて、ね。私はあいつが嫌い。うぎぎぃ。

ロッカーの上に置かれているお面。妖しいお面。三日月形の両眼がキモチワルイ。能のお面みたいにのっぺりしてる。キモチワルイ

はずのそれに手を掛けて、呪詛を呟きながらそれを被った。何でそういうことをするのか、と自分に問いながら、お面越しの世界を覗いて前へ進んでいく。後ろかもしれないけど。

私は教室の前、扉に佇んでしばらく息を静かにする。このまま、お面を付けたまま私が扉を開けて教室に入った時、皆はどんな顔をするだろう？どう思うだろう？或いは、先生か生徒が扉の前に立っている私の気配に気が付いて扉を開けた時、目の前にこんな不気味なお面を付けた女子高生が立っていたら、その人はトラウマになるだろうか？それは辛いのだろうか。それともその人の人生のスパイスになるのだろうか。何の判断も私には出来ない。なぜなら他人の気持ちは他人にはわからない。他人の人生がどうなるのか、他人にはわからない。知ろうとしたり、一時的に理解したりは出来ても、全てを共有することは不可能なのは当然だ。でもそれを悲しむ必要があるだろうか。何故私がお面を付けようと思ったのかという理由を、私は他者に理解してもらおうとは思わない。お面を付けた私を見て不愉快になった人がいたとしても、その人に不愉快になった理由を尋ねようとも思わない。気まぐれで混雑の不遇。今は、そういう気持ちなんだ。

そこまで考えた時点で、三時限目のチャイムが終わる合図を聞いた。

ピンポーン。

昔のクイズの番組で正解が出た時に流れるような陳腐な音。チャイム。それのせいで実に全てがくだらなくなって、お面を外してロッカーの上にそれを置いてから、休み時間になったから騒がしくなってきた校舎の騒音を耳にする。何か嫌だな、と思いながらロッカーから扉に振り返ると、授業を終えて教室から出て来た世界史の先生の姿が目に付く。苗字は、七曲。名前は、珍個。七曲珍個先生。

存在がセクハラと言っても偽りでは無い恐ろしい先生。それが七曲珍個先生だ。

私は心の中で珍個と連呼する破廉恥な女ということじゃないか。

「ひどいですよ先生。セクハラで訴えてあげましょうか？」
先生は突然そのようなことを言われたのに慣れているのだろうか、半ば小馬鹿にされたと言っても過言でないのにタハハと陽気に笑ってから、「それは困るなぁ」と簡素な言葉を私に告げるだけで、立ち去っていった。教科書を腋に添えながら。颯爽と、消えていく。
「相変わらずの人」
そして私は狂っているのか。困ったものだ。
崩壊したままで良かったのにねぇ。

ガカキーンとむごい音が再び鳴っているのが聞こえた六時限目の途中だけど、まだお昼を過ぎたばかりだから日差しが強くて困る。外ではまだ連中が人間をボールにして遊んでいるが、いい加減に飽きるべきだと思う。そんなことを呟く現在、午後一時頃。昼飯を食べたばかりのせいで眠気と格闘することになってしまっている自分、授業の内容がまったく耳に入ってこないが、隣で座っている松路香は眠気などちっとも感じていないのだろう、頭が回転しているらしき活発な顔つきをしている。ペンを動かして理路整然としたノートを取っている。素晴らしいではないか。
香は成績がかなり良い。この高校には勿体無い超優秀な人材なのだという話。噂。でも学校のテストの時には手を抜いているらしい。東大とか早稲田とかそういう優秀な大学に通えちゃう能力を秘めているのが松路　香という人間の目立つ所で、それでいて穏やかで親しみやすい性格をしているのだから絡みやすい。結構人としてデキていると思う。家庭を支える柱になりたいと胸に秘めた思いがあるという噂を聞いたこともあるが、真偽は知らない、けどこうやって一心不乱に勉強している様子の彼女を見ると、彼女に対する評価は上がっていくというものだ。まあ頭が良いということが羨ましくてむかつきそうになる時もあるけどね。それにしても、眠い。名前を知らない先生が黒板にチョークの線を走らせて、文字を書いている

その音でさえ眠気を誘う。カッ、カッカッ、カッカッカッ、結構この音が好きだ。心地良くなって聞き続けたくなる。ガカキーン。この音はむごい。パリリーン。ガラスの割れたような音は心地良くも悪くもない。……ガラスが割れた？

外側から丸まっている何かが飛び込んできた、ということを他の同級生の騒いでいる声から知る。飛散したガラスが肩に突き刺さって白のブラウスから血が滲んでしまった子が、多少苦しそうにしているのが、目に入る。ああ、あれは不幸人間の東堂　峰美じゃないか。車に轢かれること五回、骨折すること十回、喧嘩に巻き込まれて怪我すること三十三回、九死に一生てきな経験を年に一回はする、という何かに取り憑かれているとしか思えない事故っぷりを見せる女というのが東堂　峰美だが今日も不幸に出くわしてしまったらしい。ガラスが肩に刺さるなんて可哀想すぎるし、痛々しすぎる、のだけれど彼女は自らの片手で、力を込めて、刺さったガラスの破片を肩から抜き取っていた。ぐちゃっと。血がぼこぼこと流れているけど、止血しないとヤバイのではないか。そんな心配をしたのは私だけではないから、彼女は男子と女子ひとりずつに担がれて、保健室に連れて行かれた。可哀想にねー、とか痛いだろうねー、ああぞくっとする、などなど感想が漏れている教室。ガラスを割って他者を怪我させた張本人であるはずの丸まっている物体は、すでに丸まってはいなくて床でのびてしまっている。ぴくりとも動かない。その気絶しているらしきは男。この男が誰なのかみんな知っているのは、彼がこの学校で有名な人物だから。

「おい、寝てんなよ」「またお前か」「邪魔だよねぇ」「気絶してるし。痛みを感じないんじゃなかったっけ？」「さぁ」「峰美が可哀想だったなぁ」「起きろよ」「寝たふりしてんじゃないの？」「あ、怪我させたからびびってんだ、こいつ」「なるほど。そういうことか」「おい、起きろよ」「寝たふりはやめろよ」「小突いてみようか」「枝持ってこようぜ、枝」「枝かい」「こいつはそういうことされて喜ぶんだよ」「なにそれこわい」「そういう性格の馬鹿

がこいつ」「キモチワルイ」「ったく、集中してたのに…勉強しろよな」「サボり魔の集団の一人だもんな」「さすがだよねぇ」「物怖じしないようだけど、やってることは意味不明」「あいつら全員、調子乗ってるよ。その中でもこいつが一番調子に乗っているな」「誰かどうにかしてくんねえかな、こういうやつら」「本当だよ」「峰美は大丈夫かな」「様子見に行ってやれよ」「好きなのか？」「からかうなよ」「からかってんじゃない。尋ねてんだよ」「うるさいなぁ。てかこいつ、今動かなかったか。少し」「動いた？」「やっぱり気絶したふりだな、こいつ」「最低」「痛みを感じないんだったらサンドバックにしてやろうよ」「それもいいね」「ふふふ」「起きろよ！」

痛覚が無くて頑丈な身体なせいで痛みを体験することを望んでばかりのドM男と馬鹿にされたような評価の多いこの男は、名前をたしか尾狼　業太郎と言ったはずだ。先ほどからガカキーンと打たれていたのはこの男以外にはあり得ないであろう。常人だったら金属で打たれたら普通死ぬ。

この学校随一の不良グループの一員であるこいつは、不良グループという目立つ中でも群を抜いて目立つ一人だ。傍から見たらいじめられているようにしか見えない事を大勢からされているのに喜んでいるキモチワルイ男。人間ボールにされて打たれて校舎に頭から突っ込んだというのに、血一つ垂れ流しもしないで、気絶しているのか、気絶したふりをしているのか。

この男とは関わりたくないものだ。余計な問題を引き起こすのが得意そうだから。

ただでさえ崩壊のせいで暗がりが増している現在なのに…。峰美は大丈夫だろうか。まぁ、私が心配することじゃないだろう。彼女と親しい奴が、彼女を心配してあげれば彼女はそれで満足するに違いない。

ああ、何だか眩暈がする。今日は日差しが強い。灰色固形はしっかり食べてきたのに、調子が悪いのは何故だろう。この教室で授業

を受けている私。そして同級生の男女。生徒が怪我をしたことで慌てていた名も知らぬ先生。動かないへんちくりん男。全てが時々、歪んでいる。ジリリ、と裂けるようなノイズを発している時がある。眩暈と共に、それが起きる。

くらくらする。

「真癒。何だか倒れてしまいそうに見えるけど、大丈夫？」

松路　香が私の名前を呼んでくれた。彼女に私を心配させてしまった。それほどに傍から見れば疲労して見えるものか。彼女と私はそんなに親しくない、というか私はこの教室にいる人間と、つるむ、という状態にはならず、いつも一歩引いた感じでこのクラスの一員だ。そんな退いている私を心配してくれる松路　香。やはり良い子じゃないか。

「ありがとう。灰色固形は食べたのだけどね。風邪でも引いたのかもしれない」

「そうなの。しんどい時は言ってよ。保健室に付き添うくらいの手伝いはしてあげられるんだから」

「うん。助かる」

彼女は天からの使い、つまり天使という奴だろうか？優しいね。

まぁ社交辞令みたいなものだとも言えるが、そう考えるとやけに乾いてしまうからよそう。わざわざ言葉にして心配してくれたのは、それだけで感謝できることだ。

私は松路　香のおかげでスッカリほがらかになりそうだったのに、気絶の尾狼　業太郎が起き上がるのでほがらかが途絶えさせられて、ムカつきが湧き上がる。だが怒ってどうなる？　尾狼　業太郎とは関わらない方がいいのだ。例え怒りだとしても感情を彼に向けてはならない。無関心であればいい。香と小声で話でもしていようか。いくら声を出しても、尾狼が皆から非難されている今なら大声で喋ってもすぐ雑音に消されることだろう。

彼は起き上がる時に何処か朦朧としながら起き上がったもので、演技には見えなかったから、きっと本当に気絶していたのかも。痛

覚を持ち合わせない癖に気絶をするだなんて、おかしな男。それゆえに変な生き方をしているのだろう。人間ボールになって打たれるだなんて。サンドバックにされるなんて。痛くなくても、臓器が壊れたら取り返しが付かないだろうに。頑丈。

私は香に何となしに話す。

「ああいう男って、何か格好悪いよね。関わりたくないっていうか」

「え…。あ、そうだね。尾狼君のことでしょ？」

「そう。松路はそう思わない？　少なくとも関わり合いにはなりたくないでしょ？」

「まぁ……。何か大変そうだな、とは見てて思うから……」

香は人を悪く言うのが好きではないらしく歯切れが悪い。少し苦笑気味だった。

私は香を困らせてしまっているらしい。真癒という人を癒しそうな名前を持っているのに、実際は人の陰口を言っているし、優しい同級生を困らせている。

そんな自分を好きになることは難しい。

ただ、嫌ってもいないのも間違いない。私は自分がこんなもんだと認識している。

尾狼　業太郎が周囲の人間たちにぼこぼこにされながら教室から出て行こうと必死にもがいている光景が喧しい。うるさい。きっと校内中に響くほどの音量になっているに違いない。これが一人の人間に対する非難だけで構成されている騒音だというのだから、ある意味、尾狼　業太郎は大物だ。たしかに見た目は良くて、高身長で体格が良くて顔つきもしっかりしているのだから大物になる素質の一因は持っているのかもしれない。目立つから。

彼は散々同級生たちにもみくちゃにされてから、ふとした機会で生まれた隙間を切り抜けることによってベランダに出ると、ここは三階だというのに、躊躇無く飛び降りて姿を消した。

その直後に、保健室に出向いて不幸人間の東堂　峰美の様子を見てきたのだろう先生がどたどたと入ってきて、ベランダに出てまで

尾狼を罵倒している連中を頑張って静まらせる。十分くらいかかっていたけど、全員、何とか静まり返った。で、誰かが「東堂はどうだったんですか？」と尋ねたのは非難の材料を得るためか？東堂を純粋に心配しているのか。それはわからない。私は皮肉な崩壊者だ。

良く見るとかなりデブなその先生は、うん、と相づちを打ってから、

「彼女は病院に行かなくちゃ行けなくなった。保健室じゃ駄目だ。腕が動かなくなるかもしれないから」

と重要なことを言った。大変なことを言ったような気がする。

皆は顔を見合わせている。

私にはそれが醜いものに感じられてしまったのは、私が皮肉で嫌らしい心を持っているからだが、そんな心を持ってしまったのは尾狼　業太郎が悪くて私が悪いのでは無いと言わせて欲しい。

日差しの強い日中には、不気味な点滅が走っているのだから。

愚

八時限目。秋だから鈴虫が耳から入り込んでくるかのよう、なんて思考しながら体育館へと歩いていく今。上履きでね。途中によそへと目を向ければ、三時くらいの空には亀裂が走ってはいないことがわかるが、点滅は何ゆえに賑やかなのだろうか知りたい、そんな人生。チカチカしてるよ。千佳って同級生がいた気がする。でも、気がするだけ。

そういえば以前、どっかの賢い奴が点滅に吸い込まれて消えていたっけ。賢いのに吸い込まれていったのは絶望が突出したからだって、後に聞いたけれど、一晩寝れば気持ちも変わったかもしれないのに。でも点滅に覆いかぶさられて噛み千切られ、上半身が無くなった賢い人は、残りの下半身から血をぼこぼこ出しながらも、腸をはみ出させて、踊るような千鳥足だったとも聞くし。何が良いかなんて、わかりやしない。生は善？少なくとも他の動物からすれば、人間が邪魔な時もあるのは事実だけど。

私は特に役立っていない。地球に対してエコでもない。それが生きているのは……でも、私は命を大事にするだろう。死ぬのは痛そうじゃないか。

体育館に集まった生徒全員は、体育座りなどでそれぞれの着席をしつつ、時計の針が進む音が聞こえてきそうな程に静まり返った空間で、小さな呼吸と、小さな鼓動だけをしている。中には既に眠りはじめている奴もいるが、隣でストレッチの体勢で寝ている柔らかい体の人間は、松田　良太という名前の人物だったと記憶している。松田　良太は気の良いテニス部の人間らしい。テニス部は気が良いなんて誰から聞いたのだっけ。覚えてない。そういえば、この前表彰されていた。大会で良い成績を残したらしいが、それと気が良いのは関係があるのかは知れない。松田　良太にそのことを尋ねようと思っても、彼はストレッチをしながら眠っているのだから聞けや

しない。
松田　良太の寝顔が随分と間抜けであることを知った時に、見知らぬお姉さんの講義が壇上にてはじまった。お姉さんは白衣が似合う、理系の女って感じで頭が良さそう。研究員っていう雰囲気を如実に醸し出しているけれど。事実、校長先生の紹介によれば彼女は大学で教授をやっている優秀な女らしい。教授の割にはまだ若いけど。これも崩壊のせいだろうか。お姉さんが若作りの上手い人間というだけだろうか。
話し出した彼女の声は、流しそうめんのような軽やかさと透明感があった。気がした。腹が減っているからそういう例えが出たわけではない。
「みなさん、こんにちは。今日は一時間ほどお話をさせていただきます」
丁寧な人じゃないか。ストレッチしながら寝ていた松田　良太がその声に反応して跳ね起きた。びくん、と隣から見ると笑いを堪えるのが大変な、おかしな反応をした彼は、じろじろと壇上を見てから、でも結局、眠気に勝てないらしくストレッチ体勢に戻ると寝ちゃった。首がだらんと。
「以前、世の中はとても騒がしいことになっていましたね。政治の問題、貧富の差、原子力の危険性が騒がれるようにもなっていました。しかし崩壊が起きてから昨今、人の性質は変化し、冷静になり無感情に変わった。それは勿論、良いことでしょう、一面的には。無感情のおかげで人は整合性に真っ先に目が行くようになって、会議にしろ話し合いにしろ、感情によって振り回されることがなくなった我々は実に冷静の物事を考えるようになってきた。何しろ、無感情になった我々からは欲が失せましたよね。そういう意味では、研究者フェルクルによってもたらされた崩壊は、人間という生き物を次の段階に押し進めてくれたと思います。まぁ、勿論、喜怒哀楽が失われたことに対する反論というのもありましたが、しかし世の中に大きな問題が多数はこびっていた状況を処理するには、人類を

己に疼く欲望という奴から解き放つ必要は、間違いなくあったでしょう。他人から嫌われたくない、他人から褒められたい、安心して暮らしたい、良い人とめぐり合いたい、楽しい仕事をしたい、楽に生きたい……人にはどうしようもない、欲が付きまとうものです。欲によって主観は形作られ、その主観が世界にはこびれば世界は欲望にぬるぬると覆われて歪みます。そういう歪みから我々を解き放ったフェルクルに、我々はもちろん感謝をして当然なわけですが……」

散々聞かされた話だ。でもあの女教授はわかってない。崩壊は崩壊し始めているとまだ気が付いていないのか？まぁ、私だってそれに気が付いたのは今日の朝のことだったが……。そういえば、なんで急に私は気が付いたのだろう？他のみんなは気が付いていないのだろうか。でも、皆は非難していた。尾狼　業太郎を。喜怒哀楽をなくした我々だというなら、尾狼　業太郎に対して罵詈雑言を吐くだろうか？　……崩壊の話は、そもそも何かが胡散臭いのだ。確かに突然、私達人間は変わった。何か気持ちがスッキリとして、心持ちが涼しくなった。みんなと分かり合えているような気分にもなれたような気がする。フェルクルという何百年も生きているという噂の研究者が開発した装置によって我々は崩壊したという話だが……喜怒哀楽が完全に無くされたわけでも無い気がする。人間が機械になったようなものだ、と当時ニュースは伝えていたが、そこまで変質が起きたわけではない……何か、中途半端で、曖昧な……でも世の中の混乱がある程度おさまったのは事実だ。皆、崩壊以後は物事を考えることに努めるようになった気がする。ちょっと与えられた情報や主観の暴走だけで物事を決定付けていた慌てん坊な連中の数はたしかに減った。

それはやはり人間の根本的な性質というものが、研究者フェルクルによって改造されたおかげで生じた現象なのだろう。そう考えると、研究の成果というのは偉大だ。世の中の混乱を静めたのだから。正しい方向かどうかは、わからないけれど。

少なくとも、みんな自分のことを大切には思わなくなったような感覚だな。全員で一つの人間という意志にリンクできる時が現れたという感じだ。我の主張が、減った。公人私人で言うなら、公人ばかりになったというか。でも感情が全て失われた感じとはまた違ったなぁ。もっと、なんというのだろう、封じられている感じだ。感情が奥底に秘められた感じ。それを放っておいて、人間全体の総意に身を委ねている感覚。そこで物事を多面的に、皆の意見の中に自分を混じらせて、討論してくことによって、総合的に見てベターな解答が出て行く。崩壊によって、人の意志は繋がった。

それが失われてきていると実感する今。何が起きるのだろう。また我の主張が始まる？自分と自分に関係するものの生存にしか気がいかず、全体の人間の意志を感知できなくなる？

女教授の、自分の欲望に沿った未来に対する展望が垂れ流れていることに、彼女自身はまったく気が付いていないように見える。彼女は所詮、自分が優しく取り扱われることを願っている乙女に過ぎないのではないか？あの女教授は、自分の感性が大事だ。

話を聞いていると、そういう風に聞き取れた。

だとするとあの女教授もすでに崩壊が崩壊している。

今までどおりの、喜怒哀楽を元にして主張を繰り返す、普通の人間があそこに一人。

自らの欲に任せて動き、他者の欲が叶うことを妨げ、一寸先だけを眺めて解答をする。

私達はとても愚か者。

ふふっふふふっふ。

存在圧力

女教授の言っていた言葉は、集会が終わったばかりだから、まだ頭の中に残っている。

『大変駄目な、日本という国を悪い方向にばかり引っ張っていく法案が影でどんどん採用されていて、それのせいで国は無駄を多く作り出しているのは、政治家が男だから、プライドという鎖に縛られて一度自分が間違っているとわかっても、そのまま押し切らないと面子が潰れてしまうから彼らは間違いを認めない。そういう男たちの意地みたいなものがあるせいで、国は一部の物ばかりが得になる偏った代物に変貌し、一億もの人間が幸せに過ごせる場所にはなりえなくなる。崩壊が始まる以前に発生していた国の無駄が、崩壊後に数多く判明し、修正が実に難しいほどだったというニュースが流されたのは皆さんの記憶にも新しいでしょう。それほどに国は個人の面子によって汚され、合理的なシステムを構築できていなかったのだから、やはり研究者フェルクルは偉大で、崩壊こそは我ら日本、いや、世界にとっての最大の幸福な出来事であるとする。さて、フェルクルは女だった。女の力というのは、よって素晴らしいものだ。元より男より優れているものだ。だから女が立ち上がり男のアンチテーゼにならなくちゃいけない。女が男を非難することによって男の面子が潰れることなど、国が良い方向に傾くのなら結構なことだ。崩壊が発生した今でも、面子の問題、場の空気の問題、で恐ろしいほどに間違っている法案が現在でも国を汚染しようとしている。日本人よ、強くあれ。男女問わず、強くあれば、民主主義の中で正しい者として、国を良い方向に向わせていく国民となれるのだから。女が調子付いてきたら男がそのアンチテーゼになれば良い。男が調子に乗っているなら女がアンチテーゼになればよいのだ……そういう対話を繰り返すことで、日本人は昇華していき、いずれ宇宙さえも我が物に出来る存在になりえるでしょう』

って、宗教家かい。つっこみたくなる。途中両手を翼のように左右に開いて感極まっていたのが印象的だった。あの女教授は少し気が立っていたのだろうか。それに政治家のプライドもあるだろうが、もっと違う存在のプライドだって鎖になっているものじゃないだろうか。因果と因果と因果。国は縛り合って構成されてるんだっていうイメージ。その中で私は高校生。別に政治のことなんて知識も無いし、興味だってそんなに湧かない。今日集会が無ければこんなこと考えなかった。私は誰かに縛られているだろうか。或いは、誰かを縛っているだろうか。それは形となって現れない。現れていないよ。いつかは見えたような気もしたけど、いまやそれは忘れた。もう見えない。

一度得たからって、忘れてしまえば、得なかったのと同じなのかもしれない。だとしたら私はどれだけの物を忘れているのだろう。得ていれば、得ていたままの方が得だったものを……。

しかし私たちは、そう簡単なものでは、ないじゃないか。

十時限目が終了。荷物を整理してから、教室を出る。

松路　香は、眼鏡をかけている友人と一緒に勉強をしていた。偉いものだ、と思いながら前の扉から教室を出て、妖しげなものが置かれてばかりの廊下を通り過ぎる。途中に置かれていたタロットカードをなんとなくめくってみたら、死神の逆位置。死神とは不吉だね。

死神を二度と引かないために場所を暗記してから元の位置に戻す。そして下校時の騒がしさの中の螺旋階段をてくてく下り、一階の開けている場所に出る。

占い師のおっちゃんが、陰気な雰囲気の男子校生のことを診断している。

おっちゃんは一日中あそこにいて、つまらなくないのだろうか。

そんなことを思いながら、上履きを脱ぎ、靴を履き、昇降口から外にでる。

風が涼しい。秋の風だ。鈴虫の鳴き声が大きいが、近くに潜んで

いるのだろうか。
鈴虫を探すかのように周囲を見渡せば、部活に行く生徒と、学校から出て行く生徒とで二分されていることがわかる。校門から出て行く者。グラウンドに向う者。体育館に向う者。
ちなみに、私はもう部活は止めた。馴染めないから止めた。崩壊してから、私はそういう場所にいない方が良い側の人間なのだと、悟ってしまったのだよ。よって家に帰って勉強でもしようか。嘘嘘。眠たいから寝る。校庭を通って。畑のおばあちゃんに挨拶でもして、帰ろうかな、なんて。
今宵はどんな夢を見るだろうか、なんて思いながらてくてく歩いていく。
おばあちゃんが管理しているいつもの畑は校門のすぐ脇にある。
そこに、かつてない程の人数が群がっていた。一クラス分以上、つまり四、五十人くらいが。
「……！？」
おかしく思い、自然と小走りになって近寄る。
「何かあったの？　おばあちゃんの畑に、尾狼　業太郎が突っ込んだとか、そういうことじゃないよね？」
乱雑している人ごみに混じりながら、丁度隣に突っ立っていた気の弱そうな男に尋ねてみると、彼は初めて喋りかけられたものだから驚いている様子で、不審気に眉をひそめてくる。だから私はさらに追及する。「ねぇ、わからないの？」するとようやく彼は、うざったそうに私から目を反らしてからだが、口を開いてくれた。
「もっとひどいよ」
嫌悪が滲んでいることから、ひどいことが起こったのだとわかる。私もそれによって嫌な気分になるが、質問をここでやめるわけにもいかない。話しかけてしまったのだから。
「どういうこと？」
彼は校庭の方に目配せのようなことをしてから、
「また不良連中だよ。そして畑に突っ込んだなんてもんじゃない。

打たれた尾狼　業太郎が……」
　しばし彼は間を置いた。その言葉を紡ぐこと自体を嫌がっている様子に見えた。
　私は彼の言葉を継いだ。
「おばあちゃんの脆い肉体を、人間ボールが上から押し潰したっていうの……」
　彼はこくりと頷いた。私はそんなことが信じられないが、嘘の気配ではない。事実らしい。
　怒りが湧く。
「信じられない。今日、東堂峰美を怪我させたっていうのに、それでさえもあのくだらないお遊びをやっていたんだ……！」
「彼らは不良高校生だからね」
「彼らを擁護しているの？」
「してないよ。そういう風に聞こえたなら謝るけど、僕はああいう連中は嫌いだな。人の迷惑を考えないで自棄な行動を起こしているようにしか見えないから」
「自棄？」
「そういう風に見えるよ。男って、気が短いものじゃないか」
「男だから気が短いだなんて、それがおばあちゃんを潰して良い理由になるはずがない！」
「思春期の人間って、どうしようもない奴ばっかりだよ」
「甘えてるだけだもんね！」
「でも僕らは学校という環境に閉じ込められていて、大人にさせてもらうことは出来ない」
「その仕返しで自棄なことをしてるって！？」
「自棄になるのは、将来が不安なんだよ皆。誰も定職にありつける保障なんてありやしないんだから」
「そういう言い訳は自分勝手な主観でしかない。重たい身体で一人畑を守っていたおばあちゃんの方が、よっぽど苦痛を味わっているだろうし、大変に決まっているのに」

「でも彼女は社会に認められている。その農作業によってね。僕達はまだ社会に認められる位置づけに置かれていないのに、意味があるんだか無いんだか役に立つんだか定かじゃない、試験を繰返し受けて会社に入れ込まれるということを、まだ何年間も続けなくちゃいけない。そりゃ勉強を無いがしろにする奴は馬鹿で糞だよ。でも、納得できる奴なんて、わずかじゃないのかな」

「それを簡単に納得できるのは、社会を疑わなさすぎているってこと？」

「ただでさえ、世の中不安定なのが通常だろ？　だから安定を求めて公務員の倍率が増えるんだ。でもそれは一部の奴。日本人って、一億人もいるんだぜ」

「……おばあちゃんは、どこにいったの？　見当たらないけれど」

「いるじゃないか。……真っ黒に染まって、心臓が潰れてしまっている亡骸……」

「……え」

「尾狼　業太郎は、殺人犯だよ。人の心臓を押し潰しておいて、自分は怖くなってどこかへと逃げ出したんだ。もうあいつは学校には戻ってこないだろうね。……人を、殺したんだから」

　私は気弱な男から離れて、人ごみを掻き分けておばあちゃんの亡骸が、どういう状態であるのか、どういう無残であるのか、見ておかなくちゃいけない感覚に襲われた。

「うわ」

「なにすんだよ」

　私に押されて不愉快な声を発する連中の声が、不愉快だ。吐き気がしてくる。世の中は崩壊が崩壊して、再び主観だらけに変わって、自分勝手な連中ばかりが跋扈する。そして私も自分勝手に生きるしかなくて、自己嫌悪にさいなまれる未来を過ごさなくちゃいけなくなるのか。その未来の不幸の象徴が、畑のおばあちゃんの黒い影が、尾狼　業太郎によって潰されてしまったことだとするならば、誰が責任を取るのだろう。

一体全体、生きていけるものか。

私がもし、自分の役割を見つけられなかったら、自分の存在に耐えられないんじゃないだろうか。

君を

自転車に乗ってはいるが、家路にはついていない。尾狼業太郎を探しているわけでもない。

ただ行き場が無い己の身を、風に当てている感覚。秋の風は騒がしくなくて気持ち良い。あるんだかないんだかわからない感じが、今は丁度良い。

そういえば点滅。点滅を、道の途中でいくつか見る。誘っているかのように踊り舞いながら、幻想的な色遣いで輝いている粒子。粒子の点滅。たまに見かけるあれが、自転車に乗って道を走っているだけなのに、幾つもチカチカと見える。チカチカと言えば、千佳って同級生がいたっけ。…さっきも思ったな、これ。

粒子に近づくことは控えなくてはいけない。絶望が突出している時に粒子に近づけば、粒子がその感情に反応して世界に亀裂を走らせる。走った亀裂に吸い込まれて人は上半身をちぎられれば、下半身を露出して踊り狂いながら果てることになる。

畑のおばあちゃんと尾狼　業太郎に関する、先ほどの事件のせいで、私はおそらくいくらかは落ち込んでいる。まぁ、両親が心臓を鷲掴みし合って死んだ光景を見ても学校に行った私なんだから、畑のおばあちゃんが死んだことも明日には忘れるに違いない。薄情にもね。薄情だよ。

だから私は誰もいない無人の家で、眠るとしようじゃないか。朝まで、夢を見れば前日の事件なんてスッカリ忘れられるものだ。

問題なんて、明日出てくる灰色固形を食べられる神経を、崩壊した私がまだ維持しているかどうか、それくらいだ。そういうことにしよう。そうしなきゃ、疲れが取れない……。

「灰色固形は、栄養になるから食べるとすごい得なんだ……苦くても……」

そうぼやく時点で、私は明日の朝灰色固形を食べたくないのだと

いう事であるからして、ああ、やはり状況は変化してきていて、喜怒哀楽が元通りに芽生える私たちはマトモな世界に帰るということだろうか。マトモで私利私欲に塗れて歪んでいる世界。数々の生物が生息できる地表で、人間は六十億人いる、私達が繁盛している世界。盛者必衰。私達もいずれ、枯れる＝焦げる。そういう臭いを発していって、今朝のアキノワスレグサのように、衰退していくものだろうか。研究者フェルクルはまだ生きているのならば、私達を導く素晴らしい装置の用意をしていて欲しいものだ。きっと、もっとも頼っていいのは発明品だ。人間の為に作られながら、人間でない存在。発明品。それは個人の人為が絡み辛いような気がするから……所詮、生きている人間なんて、頼っていいものじゃないんだろう……みんな自分のことで精一杯だから、私だって畑のおばあちゃんが死ぬことをすぐに忘れてしまうのかもしれないし、アキノワスレグサが枯れたことも忘却させて、日々をぶらぶらと汗掻きながらも生きていかなくちゃ、罪悪感に苛まれて自分の存在に耐えられなくなるに違いないんだ。よって私は、役目を見つけて、その役目の為に汗を掻いて生きなくちゃ、辛いばかりになってしまうに違いないんだとわかる。……役割を見つける。

そんなことを考えながら、自転車を漕ぎ続けていた。当ても無い、見知ってはいるけど普段は通らないような道を、放浪するかのように進んでいると、どこにいても人人人。人の影。右足、左足で自転車に乗った私が、自転車によって歩道を順調に前進している。本当かわからない。たまに前後がバグる。後ろに進んでいて引っ張られているイメージが過ぎる瞬間があって、でも実際は前に進んでいるという奇妙な感覚に囚われる時、自分の身体と神経が二分されてるようで妙に心地良い。つまりそれは、自分が思春期の中で生きているということの証明に違いないと感じられる。だってその状態が正常だとは、考えにくいのだから。思春期が正常じゃないって？なら何が正常だ。

人殺しがうちの学校から出たんだよ！　うちの学校内で死んだ奴

が、出たんだよ！

正常じゃないそれは、許していいことなんかじゃない！

真剣に生きないで簡易な思考に逃げる奴は、へらへらしているのだったら、そのへらへら顔を止めさせなくちゃいけないだろう！止める気の無い腐敗した奴だというなら、どうすればいい！誰が尾狼

業太郎のように腐った奴を説教してへらへらさせないようにするっていうんだ。そんな奴って世の中にいるのか？こんな世の中は崩壊と崩壊によって欲望に塗れて、めちゃくちゃに歪んで滅んじまうんじゃないのか！……なんで滅びちゃいけない？なんで歪んじゃいけない……？……そう、それは……。

理由がある。そしてそれも結局、欲に沿っている。

私達は欲から逃げられない。自分の意志から逃れられない。

だから崩壊はすごかったのだ。一時的だったが、欲を封じ込めて喜怒哀楽を隠すことで一心不乱に機械のように作業に打ち込む。これによって私達は危機を乗り越えた。危機を乗り越えたから隠したり封じ込めたりする必要がなくなって、崩壊が崩壊しているということ、かな……。

たしかに私達は、人間味って奴を尊重するところがある。それを大切にしたくなるのは何故だろうかは、言葉には出来ないけれど。だから崩壊を崩壊させたいと、心だか脳味噌だかが欲求して人間味を取り戻していくのかもしれない。フェルクルの装置の力を超えて、喜怒哀楽を復活させる。そう考えると私たちはゴキブリのようにしぶとい欲張りだ。……こんな例えはよそう。私達はそんなに油ぎってなんかいない。

考えながら自転車を漕ぐ内に、すっかり陽が落ちてしまってペンギンの夜空。ぺんぎん。

裏通りに滑り込んで、車と接触してもおかしくない狭い道を進んでみるけど、自分の自転車の漕ぐ音が耳に入るようになって、次第にやかましくなる。けど漕ぐのはやめない。しかしそれのせいか、漕ぐことに意識が変に傾いちゃって、それのせいで今まで気付きも

しなかった足の疲れに心がやられた。どっかで休憩しよ、と思って、ぎぃこ、ぎぃこ、と漕いでいくと見つけたよ公園。大きめの、カップルも見当たらない寂れた公園だけど、たまに車が通る程度には人気のある感じが丁度良くて、自転車ごと公園の中に入れちゃう。近くにあった自動販売機にお金を入れて、ココアを買ってから緑色だと思えるベンチに座ろうかとも思ったけど、スカートを汚したくもないから、自転車に跨ったままでいることにした。ブランコを漕ぎたいとも思ったけど。汚いだろうし。

電灯がひとつ。ぼんやりとその辺りを、羽虫が飛び回っている。暗い中で、ずず、とココアを啜ってから小さく息をつく。

風は相変わらず穏やかで、あるようでないような曖昧さが、丁度良い。

「私は、生きているなぁ」

くだらないことを呟いたな今私は、と腹から笑いがこみ上げてきてココアが上手に飲めない。

にやにや気持ち悪く微笑んでしまい、ココアが飲めないで片手に納まっている。

しばらく「私は、生きているなぁ」という先ほどの言葉、そのイントネーションまで脳内で何度も反響して、反響するたびに腹の底が波を起こして痙攣する。ひきつく。それで気持ち悪くまた微笑んでしまう。そんな時に声が聞こえたのだ。背後からのっそりとした不気味な声が。

その声には陰があった。何処と無く聞き覚えがあるようだけど、しかし他に同じものが無いような、不思議な感覚を横切らせてくる声。私は恐る恐る振り返ると、パンダの形を模した滑り台が横向きに置かれていたが、声の主と思われる者は見当たらない。そもそも者であるかはわからない。

怖くなったので何処かに行こうとペダルに足を置いた時、もう一度声は耳に入ってきた。今度は先ほどよりも音量が大きくなっていて、私の鼓膜をよぉく振わせた。

もう一度パンダの滑り台に目をやると、今度は何者かが、いた。滑り台の麓に。
今しがた滑り終わったとでも言うかのように、両足を伸ばしきった体勢で、砂利に尻を置いている声の主と思わしきそれ。
それは顔全部を髪の毛で覆い隠している、小さな男の子らしきものだった。
黒い影ではない。ちゃんと人の色をしていて、子供程度の身長でそこにいる。ただ明らかに不自然なのが前髪の長さ。あれは、そう、リングの貞子だ。それの男の子版だとしか見えない。あ、でも顔を覆っているだけで身体にまでのびきっていないのだから、リングの貞子とはまた違う……。
再び声が聞こえてきた。三回目のその声は、今までで一番大きな声量をしていて、私をひどく怯えさせる。ひどく直接的で、恐怖を感じさせる言葉。
「キミノ目玉ガホシイ」
そいつの右手に、たくさんの目玉が握られているのが見えた。

その呪い

朧月に浸っている我らが世。その足付けるところの極一部に、あんなにたくさんの目玉が収集されているのは、コレクションと言うにはあまりに悪趣味じゃありませんか。集めている輩はまだ子供だというのに、そんな残虐な趣味を覚えてしまっているのは、高校生の私でも子供達の未来が不安になってしまうよ、なんて思うわけがない、あれは幽霊とかの類に違いない。前髪長すぎだろ。

「目、目玉ガ、ホシイ……」

子供の姿形をしているのに掌はやけに大きい。その片方の掌に無数の血走っている目玉を乗せているそれが、パンダ滑り台の麓から立ち上がり、ほれ、ほれ、と言いたげな仕草で目玉を見せ付けてくるのが、いじわるじいさんの様。或いはいじわるばあさんの様。

他に人はいない。一応背後を確認したけど、私以外に人はいない。この子供の姿をした前髪小僧と二人だけ。だから目玉ガホシイ、というのはすなわち、私の目玉をくくり抜きたいと言っているのと同義であるが。上げられるわけないじゃん。

「目、目ェ、目、玉ァァァ……」

「上げないよ。私、目が無くちゃ困るもの。お日様を眺めることも、テレビも見ることもできなくなっちゃうなんて私嫌よ。この両眼は大切な私の一部分、そう簡単にこれをくくり抜かせる訳がないでしょう？　おとといきやがれ」

私は前髪小僧に向って中指を突き立てた。ＦＵＣＫ　ＹＯＵ！教養が疑われる行為ではあるが、私は実際、結構パニック。だから普段やらないようなお下品なポーズをしてしまうのよぃ。許してくれよぃ。誰に言ってんだよ。

前髪小僧は一旦立ち止まった。案外、素直なものだ。もっと強引に、拷問に使われそうな恐ろしい器具か何か取り出してきたら私も本気でパニクるけど、こう素直に言うことを聞いてくれるのなら話

は易くなってくる。
そう私が思った時に前髪小僧は、苦しそうに呻いた。
「コ、ココ、コ、ココココココ」
殺すとでも言うつもりか、と思って身構えてしまう。
「ココココココ、ココアヲ、クレ。カワリダ」
「あ、ココアでいいの？」
「イタシカタアルマイ」
「目玉が欲しいってのはいいの？」
「イタシカタアルマイ」
「……」
なんか発音が聞き取り辛い。片言気味だし、咽喉が擦れているのかくぐもっているような声だし。
目玉が欲しいなんて言うから身構えてたけど、すっかり拍子抜けだ。
ココアなんて惜しくもない。もう血走ってる無数の目玉のせいで、飲み物を飲む気がすっかり失せてるんだから躊躇無くあげれる。
「……ほい」
油断してバーンということもあり得る。私は缶の上淵だけを持って、慎重に前髪小僧の目玉が乗ってない方の掌にスチール缶を渡してやった。凶器をふいに取り出されて襲われる、なんてこともなく、前髪小僧は心なしか嬉しそうにココアを受け取ってくれた。ココアは微妙に冷めてきているが大丈夫だろうか。冷めていることに癇癪を起こして、暴れたりしたら困る。
彼は随分と咽喉が渇いていたのだろうか、それともココアが大好物なのだろうか。ぐびぐび飲んですぐにスチール缶を空にしてしまい、ポイ捨てを平気でした。パンダ滑り台に、カコン、とぶつかってから砂場にスチール缶は寝転がった。
それから数秒間、公園の中で如何ともしがたい状況に押しやられてどうしようかと考え込みそうになったが、そうやって思考するのを妨げるがごとく。朧月にまで届きそうな声が発された。

「ぷは――――――――……！」
……人が密かに隠れていて、そいつが声を突然発したのかと私は思った。それほどに陽気で、ゆえに、到底、幽霊のような陰気の象徴とも言える存在が発した叫声らしからぬそれだった。
陽気というか、癒し系、みたいな？
でも前にあるのは前髪小僧とパンダの滑り台だけだし、横にあるのは草むらとブランコ、背後にはココアを売ってた自動販売機なんだから、前髪小僧が叫んだのだ。間ぁ違いない。このフレーズを良く発していた芸人さんを最近みかけない。お元気ですか、なんて言ってる場合か。
「いやー、ありがとう。おかげで俺っちは随分と元気になってしまいましたね。君がくれたココアのおかげで、しわがれていた俺っちの咽喉は清らかな流れを得ることができたのです。一生の恩を返すってことはないけど、そのかわり、目玉をくりぬくのは止めてあげようかな」
（俺っち……？　そして何だか見下されてないか？　身長差では、私が見下ろしてるのに）
「君はなかなか度胸がある人だね。俺っちに目玉をくりぬかれる人は、大体みんな俺っちに怯えてしまって、咽喉が潰れているお人形みたいな哀れな声をぷぎゃあと喚くというのに、君は俺っちを観察する余裕すらあるんじゃないのかな。ああ、だとすると……でもなぁ……」
（なんだこいつ……）
前髪小僧は急に滑舌が良くなっていて言葉をたくさん滑らせる。カタコトじゃなくなったし、前髪が普通の長さだったならば人間だと思えたかもしれない。しかし子供にしては言っている言葉が、何か、大人ぶっているし、やはり、前髪が顔全てを覆いつくす長さなのがおかしい。あと、俺っち、って何だよ。少し可愛らしいじゃないか。
ただ目玉をくり抜こうとする神経は、狂っているから近寄れない

な。
ぶつぶつ言っている今がチャンスかもしれない。隙がある。逃げてしまおう。
私は使い古している自転車のペダルの上がっている方を踏み込むことで、公園から逃れて自宅にでも逃げ込もうかと企む。自転車は私の人力によってタイヤを回転させ、私の身体を運んでくれていく。立ち漕ぎをすることで、一気に加速し、前髪小僧に追いつかれないように真っ直ぐに。
「こら…俺っちを……」
怒ってる風ではなく、私が逃げたことに対して感情が湧いてない、色のついていない声を背後にしながら、ペダルに全身から湧き上がる力を込めて、自転車のスピードをどんどん上げていき車の通りが少ない小道を爆走する。
私は途中、完全に相手を引き離したと思った。
気配も消えたし、公園からも随分と遠のいた。
鈴虫の鳴く声が耳に入ってきた。大通りを走る機械箱の行列のエンジン音が遠くからわずかに響く。良かった、と思う。世界は安泰で、通常を取り戻して目玉があんなにたくさんだなんて間違っているではないか。じゃあ何が不穏なる様相を醸し出し、我を誘う？
ああ、目玉が見ている。瞼を纏わず空気中で、埃で傷付いてしまうんじゃないのかな、いくつも宙に現れて我を誘っているが、どこへと向わせようとしている……凡……翻弄……かき乱されるようにノイズ……いや、違います……整っているのがこれ。目玉が宙に浮いて、自転車に運ばれている私を三百六十度包囲して閲覧しているのであれば、逃げ切れていなかったのだとわかるしかない。追いつかれていたのだ私は。俺っち君は、何の色も付いていない声だったが、目玉には色がある。様々な色がある。だから予測不可能。少なくとも何の障害も与えられないとは感じることは不可能。目玉たちは未知を抱えたまま、私の自転車を包囲して、それに伴って私を取り囲んでかごめかごめ。ならば私は、君たちを握り潰したい。渾身

の心などではなく、躊躇のない無情さで君たちを虫ケラとしてね。
それは敗北しないための威嚇でしかない思考。空元気のようなものかもしれないのだから、ふと目玉が自転車に近づいてくれれば、驚きが理由で本当に目玉を握りつぶしてしまうのも仕方がないじゃないか。自転車は片手だけでも運転できるんだよ？なら片手で、目玉をぐちゃり。おかしいことじゃない。不思議でも非ず。
「なんてことをー……俺っちの。目、目玉、ををー」
亀裂から前髪小僧が現れて、私の行く手を阻もうとするが、握りつぶした目玉の触感がまだ残っている濡れた片手で、私はその前髪を払おうと思ったのだが、向こうが先に前髪を左右に開いたから小僧の顔が閲覧できて。すっかり私は、闇に浮かび亀裂から現れたそれに心奪われて。
彼の顔面には、黒い穴ぼこがたくさんあった。本来人間には二つしかない、眼球を納める箇所が彼の顔面にはたくさんあって、それら全てに眼球が納まっていない。鼻や口も無い。顔面にあるパーツは大体眼球を納めるための穴ぼこだけ。真っ黒くて、闇より暗くて。
ツブシタナアアアア、という前髪小僧の声。どこに口が付いているわけでもないが、どうやら黒い穴ぼこからヒュー、ヒューと風が吹き漏れるかのように声は発されているらしくて困る。なんで彼はあんなにたくさん眼球を持っていて自由自在に、今のように宙に浮かしたりできるというのに、その穴ぼこに納めておかないのだろうか。景色は眼球が無いのに見えているのだろうか。私の顔や自転車の色、闇のひそかな息遣い、車たちのヘッドライト、機械たちの電光、私達の混沌と因果、それらを眼球もなしに確認するのは鼻や口や耳があればまだ可能だが、君にはそれも無いならば如何にして生存す。錯綜しないか。表皮から苛立ちの粉がこぼれないか。
彼の眼球の無い瞼は、赤く腫れている。菌が入っているのじゃないか。ひらひらになっていて、何か熟れているようにも見える。顔面全てを泣き腫らしているようなむごい様を、闇伝いの街灯越しに伝えてくる君の表情は、人間のもの離れがひどくて認識できない。

だから私は注目させられて目を見開いて、ペダルを漕いで鈴虫の声を忘れた。
私が生まれる前から寄り添っている眼球二つが、私の脳味噌に異様たる顔面の様子を情報として伝達するのを止めないから、脳はそれに気がかりなまま。目が釘付け。言葉だけだと恋のよう。でもあるのは異質たる禍々しさじゃない。
そんなことを思っていたから、少し大きな通りに出たというのに、車のヘッドライトの明かりにもクラクションの音にも気が付くことが出来なかった。
横向きの自転車と前向きの自動車が接触して風を切り裂きながら互いが衝撃を発したことによって私は眼球の付いたままに月夜を飛んだ。ほら朧月、かすれていて見え辛いが、私を惑わせた前髪小僧は亀裂から出てきている姿のままぼやけることが無い。景色がぼやけてきていても、こいつにだけ焦点がぶれないのは、眼球にこいつが貼り付いているからかもしれないし、脳味噌に貼り付いているからかもしれないし、案外もっと違うことかもしれないし、崩壊のせいだという事もありえる。ならば我、地に墜落する時に何を呪おうか。
自動車の運転手のことでも呪おうか。音。
ぐしゃり。

崩壊序曲かもしれない一夜じゃないのか

真っ白な意識で空中を漂っている気がした。でも真っ白に隠れて何かがいる。

その正体を暴こうと躍起になって、神経を針よりも尖らせていた、ような気がする。

でも今は、これ水田？　稲がすっかり大きくなっている夏の稲が、左右にて幾つものびていて元気な様は自然の力強さを私に連想させる。その自然のぐんぐん天へと昇っていく活気に挟まれるような形で、細めの道に私はいる。バイクに跨りながら。そして視界はモノクロ。白黒。何でだろう、とか考える時間なんて無いような焦燥感があって、今この瞬間にでも背後から恐怖の象徴みたいなものに襲われるような気がする。背筋がぶるっと震えるし、上腕二頭筋あたりに鳥肌が立っているのがわかる。振り向くことは怖くてできない。だから私は恐怖から逃げるために走り出す。盗んだバイクで。……え、これ盗んだバイクなの？

ぶぉぉぉおおおん。舗道されてない土の上をバイクが爆走する。途中、何度か転びそうになって危なかったけどさすがバイク。黒っぽく見える外装が悪くない、良い性能のバイクじゃないか。

舗装されていない、土で出来ているその細道をバイクで突っ走ること長い。随分と長い間、背後から迫る焦燥から逃れるために走り続けたというわけだ。モノクロたる世界にて、私は頼りがあまりない。私は舗道されてない道を行く。地平線の遥か向こうまでね。

ふと、地平線の遥か向こう側に、何かが浮き上がってきた。あれは何だろう。色遣いがわからないからその正体を判別することがなかなか出来ない。アフロみたいな……アフロの髪型をした人間、というのならばここから見えるわけがないしな……。んん、もしかすると巨人なのだろうか。

そんなことをあり得るものか、と思いながら風を切って前進して

いく。風が生温いが気持ち良い。これは夏の気温だ。ああライダースーツみたいなの着てるけど、これ暑いな。汗かく。
遠くに見えていたアフロ巨人は、近づくとその正体が実際は大きな樹、つまり大樹だとわかるようになってきて苦笑する。色が無いだけのことで人間と大樹の区別が付かなくなる私は、かなりの間抜けじゃなかろうか。
苦笑がやがて声を上げての笑いに変わった時、私は上腕ニ頭筋の鳥肌が収まっていることに気が付く。
大樹が見え始めてから、背後から迫り来るような恐怖感という奴が、消え去っていたのだ。
「良い感じになってきたのかも」
恐怖感が無くなっただけだというのに私は調子付いてしまい、バイクの速度を上げて一気に大樹に近づいていく。何故だか、私は大樹に対して親近感のような、家族のような友達のような親友のような同級生のような同僚のような優しい人のような親戚のような、そういう印象を持つ。だから大樹に向う私はイキイキと調子付いているのだ。気持ちが前向きになり恐怖から逃れているのだろう。風を切る力を強める。左右の稲たちが、波のように流れていく。白黒のモノクロの世界に色が付いてきたような錯覚を途中、起こす。しかし目を何度か瞬かせると、白黒に戻っていた。
大樹に辿り着く。バイクのエンジンを止めて、大樹の幹に歩いて近づく。
幹も太ければ枝の数も多い。葉が傘のように広がっていて、きっと大雨が降っても私は身体を濡らさないですむだろう。そして、雨を浴びたくない生物はこの大樹で雨宿りをしていくだろう。一体今まで、どれだけの数の生物を麓にて休ませたことだろう、この大樹は。
「……ふう」
私は一息をつきながらライダースーツを脱いでから、自分は下に制服を着ていたのだと思い出す。ブラウスもスカートも汗が染み付

いてやばい。大樹の麓、根っこのおかげで窪みになっている、座りやすい所に腰を下ろして汗を乾かした。麓には涼しい風が吹いてきて、腋を通っていくとやけに気持ちが良い。スースーする。白黒の、色による刺激が少ない世界で、葉のざわめきが安らぎを音として発する。葉が時折落ちてくるけど、触ってみれば、氷のようにひんやりと冷たいのが不思議。口の中に含んでみると、無味で、氷を舐めているかのよう。汗だくで熱を帯びている身体には心地が良すぎるから、私は自然とふわふわしてくる。氷のような葉は、時間が経つと溶けて消えた。潤いだけが口に残って、満足できる。私は気持ちが良い。

ずっとここにいられたらいいのに、と思う。ぼんやり、と。

どれくらいそこで、目を瞑っていただろうか。

ぶぅぅぅぅん。明らかなるエンジン音。それで目を開けざるを得なかった。

私が何処かから盗んだバイクを、さらに盗もうとしている馬鹿で阿呆な奴がいるのだろうと思いながら前を見れば、案の定、誰かがいるが、黒い影だ。白黒の世界の中でも極端に漆黒である人間の形をしている影が、盗んだバイクに跨ってエンジンを起動させたのだった。黒い影が誰なのかはわからない。知っている人物でないことは間違いない。見知らぬ影が、舗装されてない細道の、延々と続く直進を、ライダースーツもなしの状態で、突撃して姿をどんどん小粒にしていった。私はぼんやり。見送っている内にため息が出て、一歩も動かないで、立ち上がることもしないで、ぶぅぅぅぅんというエンジン音が遠ざかっていくのを、どこか遠い異国の出来事のように、或いはテレビ画面の中で起こっていることのように、他人事として眺めていた。盗んだ私のバイクが盗まれたというのに。

「盗んだバイクで走り出す。行く先もわからぬまま」

かの有名な曲を口ずさんでみると、あの黒い影は青春の迷子君というような途方も無い想像、つまり妄想をしてしまう。私は彼を見送ってから、道を進む手段を失くしてしまったのではあるが、特に

不愉快な気持ちも湧いてこないので、もう一度目を閉じて安らぎに浸ろうかと思った。
瞼で視界を真っ黒に染めると、その中で黄金色の粒たちが踊っているのを見つける。暖かくて輝いている私自身にしか見えない、私のための黄金色の粒たち。きらきらと光りながら群れを成して、流星群のように漆黒の世界を飛び回っている。意識を集中していないと見えない黄金色の粒たちの舞踊を、私はしばらく長い間眺めていた。瞼を閉じて。

ちゃりりん、ちゃりりん。
自転車のベルが鳴らされている。瞼を閉じて黄金色の流星群に注目している内に睡眠モードに突入していたらしい。ちゃりりん、ちゃりりんによって起こされたというわけだが、今度は何が起きるのだろうと期待のようなドキドキ感を含んだまま瞼を開く。するとまた黒い影。私の眼前で、シルバーの配色の自転車に跨っている黒い影が、こっちに向って手を振っていた。盗んだバイクを盗んだ奴とはまた別の黒い影で、雰囲気が青年のものだと思えた。実際にはわからないけど。とにかくそいつが手を、扇を描くようにして大きく振っているのだ。大きく、大きく。
どうやら私は、彼に呼ばれているようだった。あの黒い影に。
大樹の根っこに手を置いて（根っこはやけに温かかった）、身体を起立させる。立ち上がった時に何故か眩暈がして、よたつく。おさまってから歩き始めて、黒い影の目の前にまで歩いていく。私が近づくに伴って手を振るのをやめた黒い影は、代わりにちゃりりん、ちゃりりん、とまたもやベルを鳴らした。ベルで会話を試みようとしている可愛いやつなのだろうか。風が流れるにあわせて、ちゃりりんという音が空気中を滑って聞こえなくなっていく。ふと、私は黒い影が二人乗りをしたいと思っているのではないか、と突拍子なことではあるが、閃いて、なんでこんな閃きが湧いたのだろうと不

思議に感じる。あっ、ちゃりりん、ちゃりりんのベルの響きが私の無意識に働きかけているのだろうか、と予想してみるが、私は意識体なのだから無意識ではないのだから、確証は得られない。ちゃりりん、ちゃりりん、ベルが流れていく。風が流れている。生温い、夏の風。

「乗るよ。どこかに連れてってくれるのは嬉しい」

ちゃりりん。軽快な返事に聞こえる。私は自転車の背後に回って、腰を下ろした。そしてまたちゃりりんと鳴った時に、彼はペダルを漕ぎ始めて、私は今まで気が付いていなかったが、今の位置の反対にあたる方角にも細道はあったらしくて、彼はそこに自転車を進めていく。

「モノクロの世界の原因は何でなんだろう？」

黒墨のような彼はひたすらに黙りこくっていて口を開かない。ちゃりりん、とだけ。

無視されてるような気がして心地が良くはなかったけど、細道は本当に狭いものだから、少し手を伸ばせば稲に触ることができて、手に匂いがついていく。植物の香り。焦げてなどいない香り。そのことについて口を開いてみたけれど、やはり黒い影は返事をしてくれない。ちゃりりん、はたまに返してくれるけど。稲が次々に流れていく。前から後ろに。前進している私。黒い彼の自転車に運ばれて、白黒の世を。だがふとした拍子に、崖に飛び出て宙に舞った。

そう崖は唐突に現れていたから、私はしばらく状況が理解できなかったけど、宙に確かに舞っている、というよりかは重力に引かれて大地へと降下していく絶望感が、じわじわと心を蝕んで泣きたくなってしまうけど落ち続けていく。黒い影と自転車は私よりも先に落ちていて、成す術ないといったやるせない様で脱力していて物悲しい。私もあんな感じなのだろう人から見れば。風はすごく前進に纏いついて吹き抜けていくのが涼しいを通り越して寒いくらいだけど、大地に叩きつけられたらもっと冷たくなってしまうのだろう、血が抜けていってね。

（さっきも死にかけたんだ。今日は二度目だ）
そんなことを思い出すと共に、他のことも思い出すことが出来た。昔のこと。
私は小さい少女で、弟がいて、漫画本を読んでいる彼の足を踏みつけていた。わぎゃあ、と弟は痛そうに叫んでいて可哀想だったから、私はごめんねと謝ってから笑った。弟は優しいから、いいよ、そのかわり新しい漫画本を買ってよと言いながら微笑んでいたので、私はもう一度彼の足を踏んだ。弟は泣いた。またこんなことも思い出す。
私はやっぱり小さな少女で、姉がいて、姉が男に振られただとか騒いで言いたいことを私に次々に言い放つのを、なだめていた。浮いたような話を聞くのは楽しかったけど泣かれたり怒り出したりすると面倒になってくるので、私はほどほどに相づちを打ってから、嘘をついてその場を逃れようと企んだが、姉はその男に対してよほど未練があったのかしつこい。私は怒ったあまりに自分がぬいぐるみになったつもりで姉の話を聞いた。私はお人形だからいくらでも彼女の愚痴を聞いていられる。だから私はずっと無言。相づちを打つのは、そういう頷く機能がついているちょっと高めなぬいぐるみだからだよ。そんなことがあった幼い頃。またこんな話もある。
私はどうしても幼い少女で、両親が忙しなく働いている職場で、一人トランポリンに乗って跳ね回っていたのだけれど何が楽しいというのだろう。私は満面の微笑みを湛えていて、不満そうじゃない。そんなものだから、その楽しそうな私につられて誰かが寄ってきたのだけれど、まだ黒くない両親の影が目の前にあって、やめなさい、と苦笑しながら願ってくることに反発をしなかった。あまり楽しくなかったからだろう。私は二人に仕事は良いの？と尋ねると、返事はいくつかきたが、もうその内容を全て忘れてしまっている。私はその時、幼い少女だった。
でもよく考えてみたら、私に本当に両親などいただろうか。姉などいただろうか。弟などいただろうか。嘘な気がして困ってしまう

今。大地が近づいてきているから、私の死期さえも迫っていると想像ができるのに、過去に確信がもてないから涙が流せたりもしないし、潔く諦めることもできない。不気味に、下半身から競り上がって来る恐ろしさに身を震わせられるのは、恐怖心を煽る暗闇のよう。そうだ私は何を崩壊させてしまったのだろうか。過去はそういえば潰れている。誰が潰して植えつけた。悪いのは、誰だ。うん？倒錯している。

ぼちゃん。川の流れに巻き込まれてしまって息がしづらい、というか無理。

大地が待っているのではなく、下にあったのは川で私は流されていく。激流によって抗うことを認められなければ、行き先は川に任せるまま。力が欲しいものだが自転車もいないし、前に座ってくれていた彼の姿も見えない。ならば適応していくしかあるまい、魚になって。

えらを生やして川でも呼吸が出来るようになった私は、まだ死なずにすんだが、こりゃどうにも人間とは言い難い姿であるが、進化はこれに留まらず、気が付くと私は綿棒になっていた。綿棒になった私は川の汚水に塗れるあまりに、すでに抵抗力がなくて自分がどこにいるのか理解することもできない。目も鼻も口もない綿棒なのだから、当たり前田の木。

気が付くと宇宙に飛んでいて、地球を見下ろしていた。

日本が見えたので、綿棒の私はそこを降下していく。地上まで一気に落下してしまったよ、ああ、夜空に朧月、朧月、が見えているということは、自動車の運転手を呪おうと思った事故の当日が今ということの可能性が高い。希望が見えてきた。綿棒の私でも、私を救うことができるのだとしたらこんなに嬉しいことはない。綿棒の私は、秋風の力を頼りにすることで空を踊って、自転車を漕いで前髪小僧から逃れようとしている私を見つけ出すのに必死。大変だったが、あ、見つけた。、目と鼻も口も無い綿棒の私だが、第六感的能力によってそれを可能にした。シックスセンス。

自動車にぶつかる数十秒前の私は息を切らしている。そりゃそうだ、必死になって立ち漕ぎを続けたのだものね。でも前髪小僧が突如として恐ろしい顔面を晒すものだから動揺してしまい、自動車に気が付くことが出来ないまま、通りに飛び出してしまって死んだのだよね。綿棒の私があなたを救ってあげよう。

作戦はとっても簡単。

私は、私に向って一直線。そして彼女の方鼻に突っ込んで、むずむずさせて、くしゃみをさせたのである。へっくしょん。豪快なくしゃみじゃないか。綿棒の私はくしゃみによって空気中に飛んでいって地面に墜落、排水溝に落下して死んだ。だがそのおかげで、私は私として生き延びることに成功した。私の意識は綿棒ではなく、私として復活していて、自動車に轢かれる前に、くしゃみのせいで自転車を漕ぐのを止めた。綿棒だった頃の私の記憶も残っているので、前髪小僧が今現在夜の中、眼球の穴がたくさんある不潔な顔面を見せ付けてくるのは全然怖くない。一度見たから。

私は冷静な心になって、秋風が心地良いと思った。前髪小僧邪魔だな、と思った。

「人を驚かすのもほどほどにしなさいよ」

そう脅かしてやれば退散するかなと予想したのだが、前髪小僧はヒュー、ヒューと穴から声を発してくる。

で、私はその内容を聞かされたせいで前髪小僧を侮るわけにもいかなくなった。

「もう目玉が欲しくてたまらない。一つ潰されたから、もう一つが欲しいのだ。お前から奪い取ってやりたいのだ、俺っち」

私は適当に思いついたことを言ってみる。

「尾狼　業太郎っていうろくでなしの目玉でいいなら、あげるよ」

「尾狼　業太郎？」

「人殺しの目玉って好みじゃないの？」

「あ、悪くないね」

「ならそいつの所にいきなよ」

「何処にいるの？」
「知らない。人殺ししたから逃げたらしいから」
「じゃあ君が見つけて。そうしたら君の目玉は取らないよ。尾狼業太郎という人殺しの目玉でいいや」
「面倒なこと。名前を教えたんだからわかるんじゃないの普通」
「ごめんなさい。俺っちは駄目な子なんだ」
「素直だね。じゃあ、今日のところは勘弁してもらえますか。もう眠くて」
「あい、わかりました。尾狼　業太郎を見つけたら、口笛を吹いてみてください。そしたら僕はすぐに駆けつけます。で、尾狼　業太郎の目玉をいただいていきます」
「そう。じゃあ頑張ってみるわ。ばいばい、前髪小僧」
「ばいばい」
前髪小僧はお辞儀をしてから煙のように消えた。
私は自転車を漕いで、夜道をゆったりと走った。
自宅に帰って飯食ったり風呂入ったりして寝間着に着替えてベッドに横たわったりして、眠ろうとする。
すると目覚まし時計が鳴った。ジリリリリ、と。止める。
そのせいで今朝、両親が心臓をちぎりあって死んでしまったことを思い出した。
私はベッドの中で泣きそうになったが、泣かなかった。
明日は学校をさぼって、尾狼　業太郎を見つけることを頑張ろう、と思った。
で、気が付いたら眠ってた。

ちょっとした誤解と迂闊なる人生

ひどく頭痛がする。前のほうがズキンズキンと痺れていて、心臓と連結しているみたいに定期的に痛い。やかましい。そう思いながら目を開けると、夜にカーテンを閉め忘れたから、窓の外の空がやけに曇っていることがベッドの上からでもわかった。そして雷すら鳴っていた。世間一般で言えば実に悪い天気であり、良くない一日になる予兆のよう。

でも私は頭痛は嫌だが、この悪い天気については好みで、雷のくぐもった怒張の音が空を響き渡る度に気分が高揚してしまう。こんな女になった原因は崩壊。ああ可愛くもない。てか、頭痛激しい。

「ああ、起きよう……」

独り言と共に、さて今日はどうするのだっけ。と、思った時にジリリリリリ。

私はよたよたしつつもベッドから降りて、目覚ましのベルを叩いて止めた。

部屋が静まる。

静まり返ってから数秒後に、薄暗がりの部屋にフラッシュ。閃光。その閃光の、五秒後に、怒張の音。千七百メートル離れているということだから、一・七キロメートル離れているということだ。案外、雷、近いのかもしれない。

落雷されたら死ぬかな。…当たり前か。

私は、覚醒してきた頭で、先日の出来事を思い出して、今日しなければならないことも思い出す。

朧月の夜、残酷な程に無残な顔をしていた小僧のことも。

「尾狼　業太郎の居場所、か……」

目玉をくり抜かれる時に伴う痛みのことを想像してしまい、私は自然と手を眼球に添えてしまう。しっかり目玉はあるから、細かい手の皺は見える。想像のせいで発されたひりひりするような違和感

が目玉にある。キモチワルイから、その感覚を忘れるために歩き出す。灰色固形を食べなきゃ。

私はドアノブを捻って部屋を出て、階段をタタンタンとリズミカルに降りて居間に入る。暗くてしかも臭いがする。相変わらずの焦げた臭い。アキノワスレグサは枯れたまま、花瓶に刺さっている。

父母の黒い影は無い。

暗闇に呑まれて跡形も無くなってしまったのだから。

薄暗い居間の中で私はカーテンを開けて、わずかでも光を入れてから、テーブルに一つだけ置かれている灰色固形を眺める。

（父母が心臓をちぎりあったのは昨日のことなのに、ちゃんと私の分だけになっているなんて、崩壊が崩壊しそうなはずの現在の割には、しっかりしてるのね）

それとも崩壊の崩壊などという現象は起きていないのだろうか。私の妄想に過ぎないのだろうか。

わからない。それは、灰色固形を食べられるかどうかで決まるのかもしれない。私が崩壊したままなら躊躇なくこれを嚥下できるだろうけど、崩壊が崩壊したならばこんな苦いもの食べられないということになる、はずだ。

臭いをくんくんと嗅いでみると、大丈夫。食べられそうな気がする。

次に、思い切り、口に放り投げてみる。もぐもぐと咀嚼。嚥下。

苦味が口中だけでなく、全身にまで広がって私はぶるっと震える。しかし、それほどに苦味のある灰色固形を、拒否することなく食べることができた。

ということは、崩壊の崩壊は生じていないということだろうか。しかし……。

いろいろと疑問が湧く。全校集会で話をしていた女は主観で物事を話していたし、尾狼　業太郎を非難していた連中も怒りを露わにしていた。私は居間でぬいぐるみを刺した瞬間を眺めた。あれらは崩壊が崩壊することの予兆だと思っていたものだが……。

気にしても仕方がないか。
適当に私服を身に纏ってから、部屋に置き忘れていたスマートフォンを持って、以前尾狼　業太郎と付き合っていたという奇特な同級生の電話番号がまだ残っているか確認する。あった。うっかり消してなどはない。私は彼女の携帯のその番号がまだ使えるのかはわからなかったが、一つ息をついてから、彼女に連絡してみる。
コールが一回鳴るか鳴らないかの内に、彼女は通話に出た。
「はいはい」
「あ、わかる？」
「あー、わかるよー」
どうやら彼女の方も私の番号はまだ消していなかったらしい。
でも何かしらを尋ねようとした所で、彼女と尾狼　業太郎の別れ方がひどいもので、彼女はそれを思い出したら一日中腹が立ってしまい怒りに打ち震えて机を叩きまくってしまうようになってしまうのだったら大変だなと思った。下手に尋ねて嫌われるのは悲しい。
それは電話を掛ける前に気付いて当然のことだが、私は気がつけなかった。
その想像のせいで、しどろもどろになってしまい、咽喉がつかえる。
気まずい時間が流れる。向こうは用件を知りたがっているだろうし。私と彼女は親しい間柄というわけでは無いから、この気まずさは痛い。向こうは早く何か話せ、と心の中で思っているに違いない。そう想像すると余計に焦る。咽喉がつかえるし、腋汗が出る。
沈黙の痛さに耐え切れず、私は焦りと共に、なんとも、してはいけないことをしてしまう。
通話を切ってしまったのだ。ぽちっと。
「…あっ」
押したのは自分自身なのに、なぜか驚いてしまって、部屋の静寂さが耳にキーンと鳴る。
尾狼　業太郎の良く行きそうな場所を尋ねるだけでいいのに。彼

女を不快にさせるかもしれないことを、してしまった。これがクラスに広まって、私が嫌な女だという評判が広まったらどうしよう。
呆然としていると、向こうから掛け直してくれてきた。
それは彼女が怒ってないことを示しているようで助かった思いだが、この失態をしている状態で尾狼　業太郎のことを尋ねるのは、度胸がいる。あ、しかも彼が殺人犯ということは彼女にも知れているのだろうから、余計にそのことを尋ねるのは彼女に対して配慮不足かもしれない。てか、完全に触れちゃ駄目なことじゃなかろうか。友人であればいいかもしれぬが、私と彼女は別に仲良くない。ということは、やはり彼女に尾狼　業太郎のことを聞いてはならんのだ。しかし着信が向こうから来ているのだぞ。ああ、失敗した。迂闊に通話を掛けるべきじゃなかった。私は私自身の迂闊さで私を追い込んでいる。このまま電話に出なかったら、次に教室に入った時、彼女からどんな視線を送られるのだろう……。彼女には友人がたくさんいる。だから、それが怖い。
クラス内で目立ちたくは、無い。陰で話題になりたくもない。でもでも、そのくらいで私と彼女の仲が険悪になるものだろうか。いや、この電話に出なかったら険悪になるかもしれないけど、ちょっと気まずいもん。では、これに出て何か話せば助かるかもしれない……あ、そうだ、間違えてしまったということにすればいい、さっきの電話間違えた、ごめん、で足りるじゃないか。
ははは、何でこんなことに気が付かなかったのだろう。私は阿呆だ。
向こうからの着信に出る。彼女の声が耳に入ってくる。
「あ、切れたけど、どうしたの」
切れたけどが、一瞬、キレたけど、という意味に聞こえてびびったが、通話が切れたという意味かと理解して落ち着く。
「あ、ごめん。さっきの、間違えて掛けちゃったの。気にしないで」
「……え、あ、そうなの。そっか、今日、多いんだよね」
「え、あ。そうなの。多い…」

「間違い電話。あなたで今日、三件目だったりするんだよ？」
最後の疑問調が実に意味深。私以外にも彼女に電話した奴が、いまはまだ朝だというのに他に二人もいる……だと。これ、明らかに、なんか嫌な感じじゃないすか。どういうこと。なんで彼女に対して間違い電話がこんなに発生しているのだ。あ、そうか。私以外にも尾狼　業太郎のことを探している奴がいて、そいつも私と同じ理由の戸惑いから、電話を切ってしまったのだろうか。いや、そんなわけがない、みんなが私みたいに迂闊なわけではない、ならば、そうかわかった、その二件は彼女に対する嫌がらせに近い行為なのだ。きっと尾狼　業太郎と彼女がかつて付き合っていたことを知っている奴の誰かが、いたずらでそんな電話を掛けたのだ。慰めてやれよ、みたいなノリとかかもしれない。だとするならば、そいつらは許せない。…誰だ、いや、そんなことをするのはどうせ不良連中に決まっているのだ。決め付けは良くないが、この場合は間違いないのではなかろうか。尾狼　業太郎の悪友どもがフザケタ電話を掛けたのではないか。
そして、今、三件目の間違い電話を掛けられた彼女側からすれば、私はそういう糞連中と同じくらいに憎たらしい存在という風に認識できるのではないか。そう受け取られても仕方ない状態に、なっていないか……？
や、やばい……クラス内での私の立場はまずい感じになるのではないだろうか……。こ、これ、気のせいであって欲しいんだけど。勘違いであって欲しいんだけど。
「あ……う…あのー……」何か言おうとして迷ってしまったのが悪かった。
プツッ。嫌な音が聞こえたな、と思った後にツー、ツーとさらに嫌な音。通話、切られた。
がびーん。ちゅどーん。私は相当に彼女を傷つけてしまった&私はひどい奴認定。
で、でもこれは誤解なのだから後で彼女にちゃんと説明すれば、

きっと大丈夫！
大丈夫……大丈夫……大丈夫、じゃ、ないんじゃないのか……。
灰色固形の苦味がまだ口の中に残っている。
尾狼　業太郎の居場所の手がかりも付けられぬままに、私は精神的にダメージを負った。
呼吸をするのがちょっと苦しいんだけど。あ、なんか熱が出て来たような気がする。
あ、寝よっかな。寝ようかな……。
でも目玉くり抜かれたくないな……。
不良連中の電話番号も持ってないし、今から学校に行くのも恐ろしいし、手がかり無しで尾狼　業太郎を見つけられる訳も無いし……。
八方塞がりだな……。
私、目玉をくり抜かれる羽目になるのだろうか……。

ちょっくら足を上げて闊歩して

昨日も遅刻して学校に来たのだから、二日連続での遅刻。社会人ならば信用が地の底に落ちてしまうような行為であるが、私はまだ学生だからな、と思う。

学校に来ただけマシだ。本当は尾狼　業太郎を見つけるために学校に来るつもりすら無かったのだし。……これ、言い訳染みてるな。

校門から学校敷地内に足を踏み入れると、大概畑で作業をしていた、ほっかむりを被っていたあのおばあちゃんの姿は当然無い。昨日、踏み潰されて黒くなって死んでしまった。殺された。尾狼　業太郎に。畑はこれから荒れていくだろうか。私はきっとおばあちゃんの代わりに畑の手入れをしないだろう。そういう薄情な人間が、私なんだ。

今日はむごい音が鳴らない。金属バットの。不良連中はどこにいるのだろうか。今は三時限目にあたる頃だが、彼らが授業を受けているわけもない。彼らは街に遊びにでも出ているのかもしれない。ならば、彼らに尾狼　業太郎の居場所を聞くことは出来ない。

（まぁ、あの連中とは顔を合わせたくもないけど）

見ても不愉快になるだけだ。虫唾が走るだけだ。あんな甘えた連中。

何だか気分が悪くなってきそうなので連中のことを考えるのは止めにして、茶色校舎、もとい、うんこ校舎。踏み入って、今日は占い師のおっちゃんはいるかな、と姿だけ確認しようと思って顔を覗かせる。いると予想したけど、今日は用事でもあるのか、おっちゃんの姿は無い。

何故だかいないとわかった途端に、タロット占いをされたいという欲求が湧いてくるのが不思議。尾狼　業太郎の彼女だったあの人に質問をぶつけることは是か非か、占ってもらうのも良かったかもしれない。

でもいないのだから諦めるしかない。それより校舎の螺旋階段を昇り、教室へと向おう。
かつん、かつん、と私の足の音だけが響く。
歩くにつれて、教室が近づくにつれて心臓のドキドキが止まらない。緊張してる。けっこうびびってる。休み時間に密かに入ったほうがいいだろうな……。
時間を潰すために足を止める。
そして螺旋階段の途中で腰を下ろして、まるで人の気配の無い授業中の校舎。少し足で階段を叩くと、カツン、という音が螺旋を通ってエコーしていく。それは何か、面白くはなかったが緊張している状態の今をはぐらかしてくれる。楽しみつつ、時が過ぎるのを待つ。目玉をくり抜かれるよりは嫌われた方がまだマシだな、とその時間で決意を固めた。
ピンポーン。
チャイムが鳴って校舎中にざわめきが起こり始める。
それと共に私は立ち上がり、相変わらずの妖しげな廊下を歩き、途中に置かれていたタロットカードを見て、運試しだとばかりに死神のカードにだけは気をつけつつ、捲ると、何故か死神の逆位置がまた。再登場。何枚死神の逆位置を入れてあるんだ、と憤りを感じたけど怒っててても仕方が無い、なかったことにしよう。びびったら負けだ。私は彼女に猪突猛進して、尾狼　業太郎のことを尋ねるのだ。彼がいそうな場所、好きな場所ってわかる？って聞くだけのことなんだから。そしたらさっさと退散すればいい学校から。時間が経てば、失礼なことも記憶に薄れて忘れ去られるじゃないか。……まぁ、彼女に心底から怨まれたら困るが……そんな人間でもあるまい。
私は教室の前に立った。深呼吸をしてから、気合を入れたからもういける。
扉に手を掛けて、がららら。その時、ｍｉｓｓ、自分で想像した以上に力を込めてしまって、やばい、と思ったが扉はものすごい音

を経ててしまいそうになる、のを何とか防ごうと思って空いている手で音を経てようとする扉を止めようとした、が間に合わない……。
がららがっちゃん！
いくら休み時間とは言え明らかに騒がしすぎる音を教室中に響かせて、しまった。しまった。しまった。脳内にしまったが何度も繰り返されて消えていく。私は腕と腕をバッテンに交錯しているという奇妙なポーズで、その場に凍りついたように突っ立っていることしか出来なかった。
だって、クラス中のみんなが私に視線を集めているんだもの。…呆然とした様子でさ。
「……は、はろー」
自分にしか聞こえない小さな声で、そう呟いてしまったのは気持ちをはぐらかす為。はぐらかせる訳が無い。休み時間だというのに、授業中のように静まり返っている教室。小さな声だから誰も返事はしてくれない。ふと、彼女の姿を見つける。彼女は私が目を合わせた途端に、私を見ていたにも関わらず目を反らした。やばい、やっぱり気まずい感じになってしまっている、嫌われてしまうじゃまいか、と背筋がぶるぶると震えて困っちゃう展開。
私はもう、はっちゃけることにしよう、と思った。はっちゃけちゃおう、と決意した。
自分という人間をオシマイにしてしまおう、と決意するしか他に、この震えを止める手段はないと悟れた。目玉をくり抜かれない為だ、仕方があるまい、ということだ。悲しい。
ずか、ずか、と教室の静まり返した張本人とは思えない堂々振りで教室内を闊歩してみせる。誰に向っているのかと言えば、当然彼女だ。尾狼　業太郎の行きそうな場所を知っている彼女の元に、目を反らされていることも気にせず、一直線だ。ずか、ずか。
「ねぇ、ねぇ、あの、ちょっといいかな」
彼女に向って言葉を放っているのだが、答えてくれない。目も合わせてくれない。

周りの、彼女の友人たちが、彼女を援護するかのようにひそひそと、「信じられない」「ひどいな」「ちょっと…」と私に聞こえるようにして言ってくる。困ったものだ、と思うがもう開き直っているから用件だけ告げて、ダメな時はもう諦めて、帰ろう。

「尾狼　業太郎を探してるの。彼を見つけなくちゃいけないんだけど、あなたなら知っていると思って」

私の放った声が、やけに私自身の鼓膜を震わせる。静かな空気だもの。

ふと、背後から足音が聞こえたので振り返ると、松路　香が凄まじい剣幕で私に迫ってきていた。何あなたはそんな顔が出来るの、と呆気に取られている内に私の目の前にまでやってきた彼女は、「真癒。ちょっとひどいよ、あなた」と声を張り上げて、手が振われた。私に。

松路　香の平手打ちは随分と痛くて、頬がひりひりした。ぱちーん、と小気味良い音が鳴った教室内で、どっかの馬鹿男子が口笛を吹いていた。誰かが笑っている。誰かが怒っている。誰かが沈黙している。私は頬がまだヒリヒリしていたが、こんなもんじゃない、と怯む気はないと意気込む。大きく息を吸ってから、「香は邪魔しないでよ」と告げて、彼女の肩を突き飛ばしていた。彼女の細い体は簡単によろけて、机にぶつかってやかましい音を鳴らした。私はイライラした。わからずやの連中に目玉のことを言っても信用されないだろうし、それに言えるわけもない。尾狼　業太郎は人殺しだけど、その尾狼　業太郎を身代わりにして自分の身を守ろうとしていることを、堂々と言えるわけが無い。非難されるに決まってる。特に今の状況では。

もう苛立ちはひどかった。私はなりふり構わず、彼女に掴みかかって、自分でも驚くほどに凄みを帯びた口調で彼女を脅した。

「尾狼　業太郎のいそうな所を吐けって言ってんのが聞こえないのか。あ、何でもいいから話せって言ってんだよ。びびってお仲間の助けを欲しがってんじゃねえよ。何でもいいから話せよ、何のため

に私がここに来たと思ってんだ、わざわざさぁ」
彼女はここに来て初めて私の顔を見た。ひどく怯えた顔つきで私のことを見た。松路　香が背後から愚痴愚痴言ってるのが聞こえたが内容はわからない。私は、目の前で怯えた顔をしている彼女のその表情が、ひどく滑稽で、ひどく馬鹿げていて、ひどくやかましいものに見えて壊したいとふと思った。でも、その前に彼女はぶつぶつと、何かを言い始めた。
つまり、尾狼　業太郎の情報を、怯えから逃れるために言い出したということだ。
ふん可愛い奴。良い子だ。はじめからそうしていれば良かったのに。
憎悪みたいな渦が汚濁して蝕んでいるのは芯。彼女の支離滅裂で筋道が立てられていない情報を頭に叩き込んでから、渦の回転するに合わせて彼女を張り倒した。彼女の友人だけでなく傍観者を決め込んでいたクラスメイト、男女問わずが私に対して、悪い意味での視線を送っているのを空気越しに察知しながら、頭痛もするし、よたよたともするから、背後に突っ立っていた松路　香をもう一度突き飛ばしてから、私は教室の扉、にまで、ずかずかと歩いて、最後にみんなを一度見渡してから口走った。
「もうこないよ。もういれるはずもないしね。ばいばい、みんな、ばいばい、学校」
何を言ってるのか自分でよくわかっていない。何でこんな成り行きになってしまったのか、今の私には全く理解できない。崩壊のせいだ、と頭に文字が浮かんで、それが納得行く理由にとりあえずなった。私は死神の逆位置を引いたことを同時に思い出して、何だか泣きそうになってしまって、もうそっからは必死な小動物のように廊下を駆けた。逃げるようにして駆けた。
途中、珍個先生がいた。いつも通りの平然とした様子の彼が、私の異変を見て声を掛けてきた。
「保健室に行ったほうがいいんじゃないのか？」

冷たい言葉だと思えた。彼がどんなつもりでそれを放ったのかは知らないが、怒りが湧き上がりそうになる。でも何故か、笑顔になった。自然と、笑顔を浮べることが出来て、そして口が勝手に動いた。

「今日から私、旅に出ることになるんです。教室で失態を犯しましたのでいられないのです。担任にも言っておいてもらえると伝達の手間が省けて幸いです。よろしくお願いできますでしょうか。申し訳ありません珍個先生。こんな伝達の役割などという、面倒なお仕事いやに決まっていますよね。でも、私も嫌です。私はこんな状況嫌です。崩壊が悪いんです。フェルクルが悪いんです。崩壊が崩壊をはじめているって、珍個先生は知ってましたか。どうでもいいけど、先生、そのセクハラみたいな名前どうにかした方がいいですよ。ばいばい」

捲くし立てたいだけ捲くし立てて相手を戸惑わせてから逃げるように立ち去るなど、卑怯者で臆病者の私がすることだ。これでは不良となんら変わらない。私は不良なのかもしれない。甘えた屑。さ、尾狼　業太郎を見つけにいこう。先生を戸惑わせてしまって、鹿みたいに真ん丸な瞳じゃないか。へ、ちょっと面白い顔。ばいばい珍個先生。もう会うこともないでしょう。私は崩壊が崩壊したことのせいで、おかしくなってしまいました。

ちょっくら、前髪小僧に目玉をくり抜かれないために。

尾狼　業太郎を、私の犠牲にしたいと思います。

鉄くずバベルの塔

雷鳴とは如何にしてこれ程、怒りのように地を揺らす勢を持っているのであろうか。ゴロロロロロロと雷様が唸り声を上げる度に世界は真っ白になって、私は自転車のスピードを落とさなくちゃいけない。今現在、塔へと向っている。

——尾狼　業太郎は鉄くずで塔を作っているの。

——鉄くずで、塔……？

——そう。テレビで取り上げられたこともあるはずだよ。

——気が狂ってるの？　意味がわからない。

——業太郎はよく、馬鹿と煙は高い所が好きと相場で決まってる、って自分で言ってたわ。

——なるほど。自覚症状のある馬鹿なんだ、彼は。

——でも私はそんな彼が好きだった。でも人を殺した彼は、怖いんだー。逃げるのはひどいよ。

——それはきっと、正しい答えだね。彼は鉄くずの塔を作っている……。

——鉄くずバベルの塔って名前を付けるつもりらしいわ。

——バベルの塔とは、神話の。

——業太郎はね、ロマンチックな人なんだよ。

——人殺しの癖に。

——もう切るよ。あなたと話してると気分が悪くなるから。

——電話に出て話してくれただけで、私としてはありがたかったわ。

——あなたの教室での態度があまりに惨めだったから、逆に私が申し訳ない気持ちになっただけ。

——そうなんだ。

——あんな出来事くらいで、学校でやっていけないなんてことは

ないよ。気にしないで、授業受けに戻ってきたら。私はあなたに対してまだ気分が悪くなるけど、それとこれとは、別だよ多分。
――あなた、良い人なんだね。私はそれを見習いたい。
――あなたも良い人でしょう。
――尾狼　業太郎を身代わりにするのだから、悪い人に決まってるじゃない。
――え……
私は通話を切った。切ってから、なんで自分で自分を追い込むようなことを告げてしまったのだろうか、と私は私自身を信用できなくなる。自転車はだけど私の身体を運んでくれている。そりゃペダルを踏んでいるのは私の足なのだから、自転車に拒否する能力などありはしないわけなのだけれど。私がいかにこれをひどく扱おうとも、これは人間の為に、人間の手によって作られた道具なのだから、拒否することはない。ロボットが現実に作られれば、こうやって扱われて、錆びていって産業廃棄物として無残な姿になるのだとしたら、人の形をしたロボットを作るのはグロテスクだな。私は人の顔がゴミ箱に捨てられてる光景なんざ、未来の発展のためとは言えど、見たくはない。でもここは先進の国だから、間違いなくそういうのは作られるのだろう。私達は進化せずにはいられない、と誰かが言っていたのを思い出す。
また雷が光った。自転車には落雷しやすいだろうか。少なくとも塔は高いのだから落雷しやすいだろう。尾狼　業太郎が落雷で命を落としていたら大変だな。光の十秒後に音は鳴った。ゴロロロロロ。雷は、三キロメートルほど先らしい。
雨が今にも降ってきそうだ。ずぶ濡れになるのはゴメンだな。ただでさえ最悪な気分で……。
思っている間、信号待ちをしている時。ぽつり、と一滴の水が頬に伝った。私は近くにあるはずのコンビニに向かい、自転車を屋根ぎりぎりに寄せると、ビニール傘を買うために店内に踏み入った。店内にはお客の姿はまばらで、おでんが湯気をたてているのが見え

る。今の季節は、秋。

あ

不良が殴り合っている。
コンビニの駐車場で汗も掻かないで静やかに。
肩と肩を拳でぶつけあっている癖に、涼しい顔を気取って続けている。通り過ぎる涼しい顔をしている運転手は、心の中でどう彼らを眺めているだろうか。どこにでもいる不良。どこにでもいる私。おでんは買わなかった私。自転車で鉄くずバベルの塔へ向う足は、ペダルの上。
恥じらいもなく、彼は塔を建築しているならば、雷は天からそれを砕くか。
その役割を任されているのがこの肉体だとするならば、口笛を吹く用意だけはしておこう。
電車の音が耳に残る。騒がしい人々の流れ。飛んでいく鳥。
十字路を通り過ぎて、不良たちが何ゆえに、軽やかで涼やかだったのか、理由を知りたく思う。　わかりはしない。悪い雲が連なる空は、灰色と白色の境界、鈍い音。
自転車のタイヤが地上と擦れて、私は運ばれる。自転車を運んでいく、空。
地上と共に、砕け散っていく粒子。また点滅しているが、放任。近寄れば今、ちぎられるだろうか。わかりはしない。
途中に気が狂っていそうな人の隣を通り過ぎる時、声が聞こえた。
「庭にある」
通り過ぎてからも空は境界を分けているまま濁っている。いい加減にして欲しい。
乳酸ばかりが溜まっている。もう足が疲れてきた。気力があればこんなことにならないのに。
尾狼　業太郎を犠牲にするのに、活力が無いことは、嫌なことだ。もっとイキイキと彼を潰そう。

自転車の上で声を聞き、車輪が擦れるに合わせて呼吸が乱れる。
道を進んでいく内に、暗雲は余計に灰色を濃くして黒く染まる。
また不良が殴り合っている。
今度はアパートの前で胡座を掻きながら。
言葉と言葉をぶつけ合っている癖に、拳もふるっている。
片方の男はペンギンの被り物をしていて、片方の女は怪獣の着ぐるみを着ている。
その二人が不良をやっていて、殴りあったり喧嘩したり。私はその横を通り過ぎながら、道端に唾を吐いて湿気の増えてきた空気に、苛立ちを募らせる。ぬいぐるみのこと、思い出して。
ぽんぽんチャリが進むに連れて見えてきた鉄くずバベルの塔。
私、自転車をそこら辺に放置したよ。粒子が見えた。亀裂から手招きしている何か。
私はそんなのどうでもいい。
尾狼　業太郎を殺そう。尾狼　業太郎の目玉をくり抜いてもらおう。
私はその覚悟を持っている。鉄くずバベルの塔をよじ登って、その覚悟を示すんだ。
私はずっと、それを祈ろう。黒い世界で永遠に。
不良のことも、もう忘れた。
おでんのこともう忘れた。
占い師のおっちゃんに占ってもらえば良かった。
きっと鉄くずバベルを登りきった時に、そこに尾狼　業太郎がいたら、もうどうしようもない。
全てはどうしようもない。
世の中はどうしようもない。私はどうしようもない。
だから亀裂が走るんだ。崩壊が崩壊するんだ。
尾狼　業太郎は痛みを感じないのだから、こんな鉄くずバベルを一人で作っていて平気なのだろう。
だから痛みを感じることは大切だとするならば、私はあいつを許

さない。
許さない。許さない。許さない。
痛みを感じないあいつを許さない。鉄くずバベルの塔に登ったらすることは簡単だ。
あいつを殺してから私も手招きされればいい死神に。
そうして、終わるんだ。
永遠に。
亀裂はまだ走っている。それに走っていけば命を落とせるなら、もうそれでいいよ。
なんでやる気を見せなくちゃいけない。
この物語は、そういう結末を迎えたんだよ。
ばいばい、脱臼。
ｄｉｓｌｏｃａｔｉｏｎ。
不完全燃焼な終わり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9804t/

dislocation

2011年6月28日16時03分発行